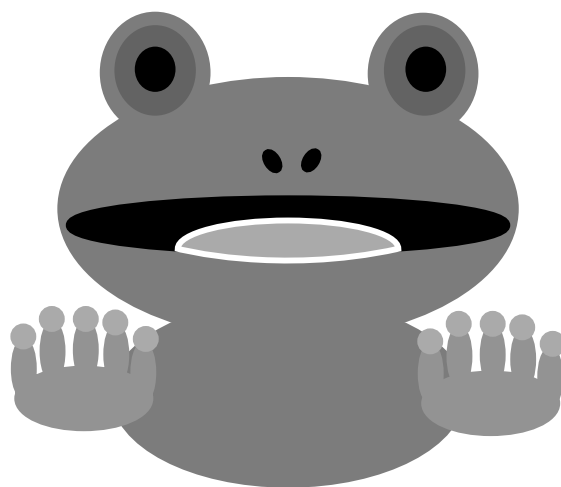


新しい物語づくりに向けて
「つなぐ」から「つくる」へ
みんなで作るコムケア物語の3年目

住友生命社会福祉事業団
コミュニティケア活動支援プログラム
2003年度 活動報告書



住友生命社会福祉事業団
コミュニティケア活動支援センター

コミュニティケア活動支援センターは住友生命社会福祉事業団より本プログラムの実行事務局を受託している組織です。

みんなで作るコムケア物語 3年目のテーマは「つなぐ」から「つくる」

住友生命社会福祉事業団の支援で始まった、コミュニティケア活動支援プログラムは、3年目もさまざまな活動に取り組みました。新しい物語も、いくつか生まれだしています。そして、私たちが目指す、大きな福祉に向けての支えあいの仕組みの展望が少しずつ開けてきました。

福祉やまちづくりの世界に新しい風を起こしたい。

これまでなかったような、市民活動を支援する仕組みを創りたい。

これが、コムケア活動に取り組み出した時の、私たちの思いでした。

1年目（2001年度）は「ひらく」がテーマでした。

忙しさの中で、ともすれば個別のテーマや自分たちの活動に閉じこもりがちな福祉活動や社会活動を、外に向けて開いていくことで、新しい発見や展開が実現できるのではないかと呼びかけました。市民活動で得たノウハウは、社会の財産です。お互いに活かしあう事で、ノウハウはさらに進化していくと、私たちは考えました。

2年目（2002年度）のテーマは「つなぐ」でした。

開く姿勢を持った、さまざまな団体や活動を、分野を超えてつないでいくことができれば、そこからまた新しい物語が生まれていくはずです。幸いに、そうした思いに共感してくれた多くのコムケア仲間を支えられて、いくつかの新しい試みも実現できました。バザール型コムケアフォーラムには20を超えるNPOと200人を超えるさまざまな立場の人が参加してくれました。

そして、いくつかの新しいつながりが生まれだしたのです。

3年目（2003年度）のテーマは「つくる」です。

つながりの中から、新しい物語を創っていくことを目指すことにしました。

しかし、みんなそれぞれに思いを持って精一杯活動している人たちですから、何かを一緒にやりますことは予想以上に難しいことでした。

なかなか展望が開けずに、時にはめげたり、途中で後退したり、挫折感も味わいました。

しかし、多くのコムケア仲間を支えられて、年度終盤に一気に展望が開けてきた感じがします。

しかも、うれしいことに、この3年間で、私たちが標榜する「大きな福祉」や「共創スタイル」に、共感してくださる人が増えてきました。共感するだけでなく、私たち以上に、そうした理念を実践してくださっているのです。

そうしたコムケア仲間のおかげで、コムケア活動は3年目にして、ようやく目指すビジョン実現の展望が開けたように思います。コムケア活動の枠組みの土台が築かれたといってもいいでしょう。

本報告書は、こうした活動の3年目の記録です。

ようやく築かれたコムケア活動の土台を大きく育てていくのは、これからです。

みなさんにも、ぜひこの活動への参加をお願いしたいと思っています。

2004年5月10日
コミュニティケア活動支援センター
事務局長 佐藤修



目次

第1部 プログラムの概要と活動概要

1. プログラムの概要	4
2. 資金助成プログラム	5
3. 活動支援プログラム	7
4. 交流支援プログラム	8
5. プログラムへの評価	10
6. 資金助成プログラム選考委員講評	11
7. この3年間の振り返りとこれからの展望	19

第2部 資金助成プロジェクト活動報告

1. 活動支援プロジェクト	22
2. 活動費一部支援プロジェクト	36
3. 支援イベント	41
メッセージ	44

このプログラムを通して実現したいこと

○安心快適社会に向けての「大きな福祉」への関心の醸成

福祉というと、高齢者介護とか障害者支援などの直接的な問題解決に目が向きやすいが、将来的な問題も含めて、すべての人が安心して快適に暮らせる社会づくりを「大きな福祉」と捉え、そうした活動への助成を通して、社会における「大きな福祉」「安心快適社会の実現」への関心を高めていく。

○さまざまな市民活動をつなげる共創型相互支援の輪づくり

実際に市民活動に取り組んでいると、忙しさの中でなかなか外部に目を向ける余裕がなくなり、タコツボにおちいりがちだが、効果的な活動をしていくためには、さまざまな市民活動が連携し支えあっていくことが必要である。テーマを超えて、さまざまな市民活動が学び合い、支え合う「共創型相互支援の輪」を広げていく。

1. プログラムの概要

このプログラムは、みんなが気持ちよく生活できる社会に向けて、さまざまな活動に取り組んでいる市民活動団体や個人を支援することを目的としています。

資金助成が中心に置かれていますが、単なる資金助成プログラムではなく、応募された市民団体と一緒に、お互いに支援しあえる関係を育てていこうということを理念にしています。つまり、資金だけで支援する側と支援される側に分かれるのではなく、資金以外のものも含めて、お互いに支援しあえる関係を育てていくことを目指した、活動の輪づくりプログラムです。

市民活動のネットワーキングの大切さは多くの人が指摘していますが、こうしたプログラムは実際にはまだ少ないように思います。ただ仕組みを構築すればいいわけではないからです。実際に参加した人たちが、自らの課題を超えて、あるいは現実の忙しさを超えてつながっていくことは、口で言うほど簡単なことではありません。現実的な効用がなければいけません。それに、市民活動に取り組んでいる人たちは、当面の課題に追われがちで、ほかの問題に目を向ける余裕がなかなか持てないのも現実です。

しかし、社会の複雑さを考えれば、個別課題への対応だけで対応できることには限界もあります。一見、関わりが少なくように見える問題が、深くつながっていることも少なくあり

ません。個別課題を超えて、活動をつなげていくことが、問題解決にとってとても大切になってきているように思います。

このプログラムが対象にするテーマは、「大きな福祉」に向けての「コミュニティケア」です。このプログラムでは、みんなが気持ちよく生活できる社会（大きな福祉が実現している社会）に向けての活動はすべてコミュニティケア活動と考えています。ですから、なんでも対象になります。これに関しては、プログラムの性格が曖昧になるという意見もありましたが、私たちは敢えて切り口をできるだけ広げたいと思っています。それが大切だと考えるからです。

■目的：支えあいの輪づくり

次の2つがこのプログラムの目的です。

- ①コミュニティケアの分野で活動している（あるいはこれから活動しようとしている）市民活動団体の、新しいプロジェクトを支援すること。
- ②そうしたことを通して、さまざまな市民活動のつながりをつくり、お互いに支援しあえる市民活動の輪を育てていくこと。

■支援形態：共創型相互支援の関係

資金助成だけではなく、応募された市民団体の活動に関して、可能な範囲で何でも相談に応じることにしていますが、それを可能にしていくために、応募された市民団体にも自らの強みを活かして、他の団体の支援に参加していただく仕組

3つのキーワード

◆大きな福祉

社会にあるさまざまな問題を、みんなが自分の問題として共有化し（つまり当事者になって）、みんなが知恵と汗を出しあいながら、みんなにとっての新しい価値（積極的な解決策）を創出していくこと。これが、私たちが考える大きな福祉です。福祉というと、介護や高齢者問題など、特別の問題をイメージしがちですが、私たちの生活や社会はさまざまなものが複雑に絡みあっています。ですから、個々の問題ごとに解決していくと同時に、それらをつなげていくことが必要です。

◆コミュニティケア

コミュニティケアという言葉は、一般的には、「さまざまなハンディをもつ人々を、隔離された施設ではなく、地域社会の中で、自立した生活が送れるように支援しようとする考え方」とされていますが、私たちはもっと広義に捉え、「お互いに気遣い合いながら、放っておけないことに対して、それぞれが出来る範囲で汗と知恵を出しあうこと」と考えています。

コミュニティとは「重荷を背負いあった人間のつながり」ですが、私たちは最近、重荷を背負いあう関係を捨ててきたように思います。しかし、重いので捨ててしまった重荷の中に、実はとても大事な宝物があったのかもしれない。そんな思いもあって、改めて重荷を共有する、人と人のつながりを大事にしていきたいと考えています。

◆共創型相互支援の輪

コムケア活動は、誰かが誰かをケアするという一方向的な活動ではありません。参加した人が、お互いに支援し支援される双方向的な関係を目指しています。ケアすることで実は自らがケアされていることに気づけば、活動は持続し広がっていくはずですが、やや気負って言えば、この活動を通して、社会に、「ケアしあう文化」の風を吹きこみ、さまざまな活動を「大きな福祉」に向けてつないでいきたい。それによって、相互支援の輪をみんなですべて育てていきたいと考えています。共創とは、一緒に汗と知恵を出し合って、新しい価値を創りだしていくことです。

みになっています。

つまり、支援する側と支援される側に分かれるのではなく、お互いに支援しあえる関係を育てていくことを目指しています。したがって、参加（応募）したみなさんにも、自分たちの強みを公開してもらい、できる範囲で「支援する側」でも活動してもらうことを呼びかけています。

■具体的なプログラム：毎年、参加者の意見を踏まえて進化

（1）資金助成プログラム

①コミュニティケア活動支援（50万円と20万円の2種類）

②イベント支援（一律10万円）

（2）活動支援プログラム

活動に関するすべての相談に可能な範囲で応じ、このプログラムに関わってくださったみなさんを巻き込みながら、問題解決に努力します。

（3）交流支援プログラム

参加した人たちが交流し学びあえる場を、さまざまなかたちで創出していきます。

2. 資金助成プログラム

（1）コミュニティケア活動支援

コミュニティケアに関わる活動に取り組んでいる団体やこれから取り組もうとしているグループの新しいプロジェクト起こしを中心に、総額1050万円の資金助成を行いました。

■募集活動

6月14日のコムケアフォーラムで募集要項を発表し、8月11日までの期間、次のメディアを通して募集を行いました。

- ・募集案内チラシの配布
- ・各種のメーリングリスト
- ・コムケアセンターのホームページ
- ・コムケアフォーラムや地方交流会での呼びかけ
- ・新聞などでの告知案内

■応募に関する相談

応募段階から相談に応じました。相談内容は申請書の書き方などが中心でしたが、プロジェクト起こしそのものや団体の運営に関わるものもありました。電話やメールのほか、直接、事務所まで相談にくる団体もありました。また、コムケア団体訪問や地方交流会などの際にも、その地域の団体からプロジェクトの相談を受けることもありました。資金助成とは関係なく、活動支援がはじまったものもあります。

■応募状況

応募件数は総数163件でした。

<地域別分布>

北海道	4
東北	4
関東	74
中部	31
関西	20
中国四国	16
九州沖縄	14
合計	163

<対象別分布>

障害者	31
地域福祉	25
子育て	24
芸術・文化	20
高齢者	16
環境	14
介護者支援	6
国際交流	5
女性	4
医療	4
ホームレス支援	3
スポーツ	3
犯罪被害者支援	2
その他	6

<目的別分布>

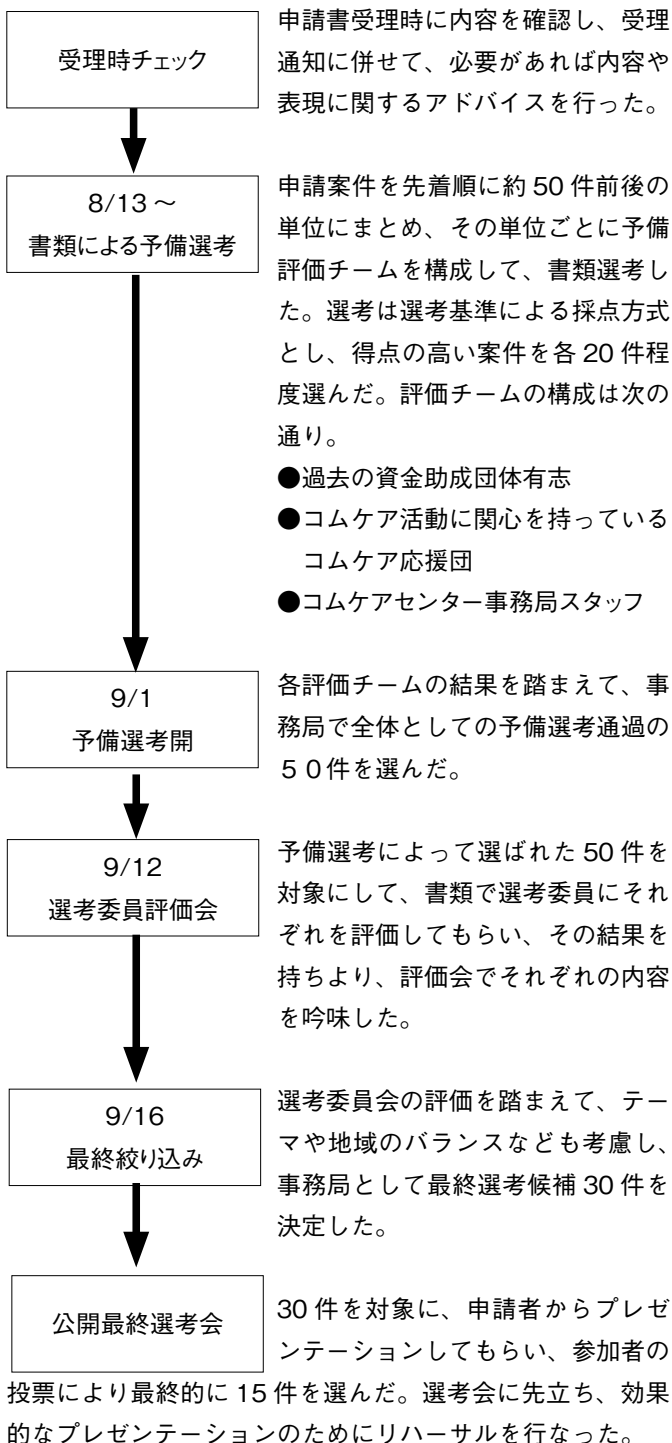
路上生活者・不登校者・高齢者・障害者・難病者・被害者の生活支援	33
誰もが楽しく安心して住める社会づくり	25
地域とのふれあい・交流	16
芸術・音楽を通じた社会づくり	14
親・介護者の支援	13
情報提供・ネットワークづくり	12
環境保全・自然とのふれあいづくり	12
自分たちの活動の周知普及	11
生き甲斐・健康づくり	11
文化・伝統を伝える	9
人の育成	7
調査・研究・開発	6
外国人の支援	4
国際交流	2

■選考方法

選考の進め方はホームページで公開し、途中でも選考がどう進んでいるかわかるように報告をしました。選考に関しては、できるだけ多くの人に事前評価をしてもらい、そこで選ばれたものを専門家から構成された選考委員で評価してもらい、それを踏まえて事務局で30件の最終選考候補を選考しました。

最終的には、応募者も参加できる公開選考会で30件のプロジェクトを発表してもらい、投票により支援先を決定しました。最終選考会での投票得票数もホームページなどで公開しました。

大きな流れは次の通りです。



■選考基準

選考に当たっては、次の点を参考としてもらいましたが、最終的には「大きな福祉」の視点から、プロジェクト全体の意義を考え、総合的に判断するようにしました。

- ①社会性：本プログラムで定義するコミュニティケアの理念に沿っていること
- ②先進性：これまでなかったような新しい要素が含まれていること
- ③発展性：一過性のものではなく、継続的であり発展が期待されること
- ④汗のかき具合：お金で解決しようとしていないこと
- ⑤支援の必要性：支援することが実現の不可欠な要素であること

■選考委員

予備選考は実践的な立場にいる人と第三者的に活動に関わっている人とを組み合わせることに留意しましたが、基本的には当事者意識の高い人に選考をお願いしました。昨年に引き続き、前年度の支援先団体の有志が自発的に参加してくれたことも大きな特徴です。

さらに、選考委員は昨年同様、コムケア理念に共感してくれている専門家をお願いしましたが、選考委員には「選考」というよりも、予備選考で選ばれた個々のプロジェクトの内容に関して、それぞれの専門的な立場から評価してもらいました。

最終選考会には、応募団体も含めて、101人が自発的に投票に参加してくれました。

<予備選考委員>

- 昨年度資金助成先の団体からの有志選考委員 5人
井上英之（ソーシャルベンチャー・パートナーズ・東京ベイ）
下山浩一（コミュニティアート・ふなばし）
橋本克己（彩星学舎）
藤澤浩子（よこすかパートナーシップサポーターズ）
横田能洋（茨城NPOセンター・コモンズ）

- コムケア応援団 11人
秋山みち（埼玉県社会福祉協議会ボランティアセンター）
飯沼勇一（㈱アドエンジニアーズ）
大川新人（NPOマネジメントコンサルタント）
萩原悦子（埼玉県社会福祉協議会ボランティアセンター）
小山美代（公立研究所）
坂谷信雄（東京都職員研修所）
新谷大輔（三井物産戦略研究所）
瀬谷重信（㈱コラボレーション経営研究所）
長沢恵美子（経団連1%クラブ事務局）
渕野康一（東レ経営研究所）
山野辺明美（埼玉県社会福祉協議会ボランティアセンター）



<選考委員>

- 片岡 勝 : 市民バンク代表
 北矢行男 : 多摩大学教授
 木原孝久 : 住民福祉総合研究所代表
 高橋流里子 : 日本社会事業大学教授
 町田洋次 : ソフト化経済センター理事長
 松原優佳 : 市民セクターよこはま

<公開最終選考会で投票に参加した人> 101人

- 最終選考対象団体 29
 上記以外のNPO 27
 企業関係者 26
 行政関係者 4
 学生 4
 選考委員(出席者のみ) 2
 その他 9

*選考に参加する資格条件

- ①対象となるプロジェクトもしくはその団体に関わっていないこと
 ②事前に対象プロジェクトの申請書を読みこんでおくこと
 ③選考会には最初から最後まで参加すること

**(2) イベント支援**

コミュニティケアに関わる団体が主催する、「つながり」づくりのイベントに対する資金助成を行いました。これまでの体験から、資金助成プログラムへの応募団体の中に、何らかのかたちで応援していきたい団体がいくつかあったにもかかわらず、資金助成プログラムの枠組みだけでは対応できないために、実験的に試行したプログラムです。

したがって、規模も小さく、資金助成額は一律10万円で、支援団体も5つだけでしたが、その効果は大きく、こうしたイベント支援はこれからも重視していく価値があることが確認できました。

■募集活動

コムケアフォーラムや交流会での呼びかけのほか、活動支援プログラムの最終選考会でも告知しましたが、基本的にはメーリングリストとホームページでの呼びかけが中心でした。

実際には、活動支援プログラムで最終選考に残らなかった団体への応援の意味合いも込めたため、申請プロジェクトを吟味した上で、事務局から応募を呼びかけた団体もあります。

予告期間をもったこともあり、実際の募集期間は、10月15日から10月末日までの短い期間にしました。

■応募状況

応募数は12件でした。これまでコムケア活動に参加したことのない団体からの応募も2件ありました。

■選考方法

募集要項に明記した、次の条件を踏まえて、事務局で選考しました。

<対象となるイベント>

- ①「人のつながり」「人のふれあい」の要素があること
 ②分たちで企画運営する手づくりのイベントであること
 ③複数のコムケア仲間が参加すること
 ④大きな福祉の理念に即していること
 ⑤活動報告書を作成すること

■選考結果

次の5つが支援対象になりました。

団体名	イベント名	開催時期
NPO法人かすたねっと	みんなで暖まろうよ!「冬籠り祭」	2004年1月18日(日)
NPO法人環境ケア設立準備会	こども達と社会を結ぶために～いろいろな人達どうしの協力を考える	2004年3月21日(日)
コミュニティアート・ふなばし	ちばNPOユースフォーラム	2004年2月11日(水)
ふるさと環境市民の会	太陽とかぜの学校 グリーンエネルギーで地球を元気にしよう	2004年3月30日(火)
NPO法人国際比較文化研究所	「ひだまり」交流会	2004年2月28日(土)

3. 活動支援プログラム

コムケア仲間(資金助成プログラムに応募したりコムケア活動に参加した団体や個人)に対しては、資金助成の対象であるかどうかには関係なく、その活動に対しては原則として何でも相談にのっています。

相談内容は多岐にわたりますが、内容によっては各分野の専門家や企業、病院などの協力も得て、対応するようにしています。

■申請プロジェクトに関するアドバイス活動

資金助成プログラムの活動支援関係に応募し最終選考に残

らなかった133団体に対して、最終選考に残らなかった理由と申請内容に関する具体的なアドバイスなどを個別に書状で連絡しました。

件数が多かったため、十分なアドバイスにはならないと思いますが、相互支援関係のはじまりになればという思いから、この活動を継続しています。この活動はその後の交流会などでも話題になり、またそれを契機に交流がはじまるなど、コムケア活動の理念や姿勢を理解してもらう効果がありました。

これまでの資金助成プログラムの多くは、選考過程や選ばれなかった理由などの説明が十分ではなかったが、説明を受けて納得したという声も寄せられています。こうした地道な活動が、資金助成プログラムの効果を高め、市民活動をエンパワーすることを改めて実感しました。

■資金助成団体との個別意見交換

資金助成団体に関しては、必要に応じて連絡をとりながら、活動に参加したり、相談に応じたりするなどの対応をしました。しかし、昨年同様、それぞれの事情もあるために、この活動はなかなかうまく軌道にのせられずにいます。各団体からの定期的な活動報告もお願いしましたが、なかなか報告は出てこず、かといって報告を強要するのは趣旨に反するため、対応に苦慮しました。外部からの能動的な支援活動に対する名案は見つかりませんでした。

コムケアセンターが、もっとコムケア仲間と目線を同じにし、信頼関係を高めるとともに、具体的な提供メニューを明確にしていくことが必要だと思います。

■個別活動相談への対応

資金助成団体以外からの活動に関する相談も引き続き行っていますが、コムケア活動を知って、行政や企業、あるいはコムケア仲間以外の人からの相談も増えてきました。福祉関係の教材の紹介や市民活動支援に関する行政からの相談や問題を抱えている個人からの相談もいくつかありました。

相談が契機になって、コムケア活動の応援団になったり、活動に参加したりする人も増えています。気楽に相談に来てもらえるように、コムケアセンターをもっと公開していくことが必要です。

■コムケアセンター事務所の開放

本郷にあるコムケアセンターのオフィスを、コムケア仲間にも活用してもらうことも始めました。市民活動にとっては、場所の確保は大きな課題です。東京のコムケア仲間に対しては、要請があれば、可能な限り、オフィスを開放しています。また、地方のコムケア仲間には、いわば東京のオフィスとして、出張時に活用してもらう便宜も提供しています。ただ、いまのままではなかなか使いにくい面もありますので、これに関してはこれからの課題です。

さらにいくつかのコムケア仲間からは、共同オフィスにできないかという要請も受けています。単なる場所としての共同の場ではなく、人的にも活動的にも共創関係が育っていくような、新しいコモンオフィスの実現を検討していく予定です。

4. 交流支援プログラム

本プログラムの理念にそって、参加団体を中心に、様々な交流の仕組みをつくっています。

■資金助成プログラムに関連しての交流の仕組み

最終選考会は単に資金先を決定するだけのものではなく、そこで他の分野の市民活動がどのような問題意識でどのような取り組み方をしているかを学びあう場でもあります。参加者からは、「全国で同じような思いで活動している仲間がいることを知って元気づけられた」とか「みんな同じような悩みを持っていることがわかって、またがんばる気力がでてきた」という意見が寄せられています。

大勢の前での自分たちの活動紹介やプロジェクト説明をしたことは初めてという団体がほとんどでしたが、これからの市民活動にとっては、外部とのコミュニケーション能力は非常に重要です。その意味でも、こうした形での交流体験は有効だと考えています。

プレゼンテーションやコミュニケーションに関する研修会もこれから検討していく予定です。

選考会の後の交流会は特に効果的でした。交流会には、NPO関係者だけではなく、企業や行政の人、あるいは税理やまちづくりの専門家や学生なども参加してくれましたので、いわゆるNPOの人たちの集まりとは違った出会いがあったと思います。社会起業家支援に取り組む経営コンサルタントが、これを契機にいくつかのコムケア仲間の応援活動を始めたたり、学生とNPOとの新しいつながりができたり、新しい物語もいくつか始まっています。

■メーリングリスト

電子ネット上でのメーリングリストは参加者が200人を超えています。少しずつ議論も増えています。また、情報やノウハウの提供を求める投げかけに対して回答が出てくるなどの、支えあいのやり取りも始まっています。

今年度は、コムケアのメーリングリストに加えて、東京で開催したコムケアフォーラム2004東京のための、専用メーリングリストも開始しましたが、目的が明確であったためか、こちらのメーリングリストのほうが議論や情報交換が活発でした。さらに、そこから個別テーマのメーリングリストもいくつかスタートし始めました。

どういうメーリングリストの設計が効果的かを検討し、場合によっては複数のメーリングリストの仕組みを育てていくことを検討したいと思います。

■コムケアサロン

コムケア仲間やコムケア応援団を中心にして、原則として毎月1回、コムケアセンターで自由参加の学びあいの場を開催してきましたが、NPO関係者は忙しいせいか、なかなか参加者がのびません。参加された方からの評価は高いのですが、継続実施にはかなりエネルギーが必要です。そのため、今年度はサロンは最小限にとどめ、テーマ別に関係者を集めたサロンを開いたり、個別テーマの検討会を行うなどの試みを行いました。

将来は日程だけを決めて、自由に集まった人たちのコムケア論議の場にしたいと思っていますが、まずはコムケア仲間のつながりをもっと大きく育てていくことが大切だと考えています。

今年度開催したサロンは以下の通りです。

- 第12回 テーマなしの情報交換会（11月12日）
- 第13回 テーマなしの情報交換会（1月28日）
- 第14回 コムケアフォーラムに関する意見交換会（3月8日）
- 第15回 コムケアフォーラム検討会（3月23日）
- 第16回 コムケアフォーラム検討会（4月13日）

またこの他に、たとえば次のようなサロンも開催しました。



●病院をテーマにした意見交換会（8月12日）

今年度の資金助成先のWAP、昨年度支援先の花音（大阪）と一昨年度支援先のヘルスウォッチ（名古屋）の3グループを中心に関心を持った人が集まり、病院を元気になる場にしていくことを話しあいました。これから活動を発展させていく計画です。

●社会起業家支援をテーマにした意見交換会（4月5日）

コムケア活動の応援団になってもらっている社会起業家支援に取り組むメンバーを中心にこれからの取り組みについての意見交換会を開催しました。企業コンサルティングに取り組んでいるコムケア仲間も参加してくれました。ここから新しい活動が生まれつつあります。

■ニュースレター「結びこむ」の発行

オンラインのメーリングリストとオフラインの出会いの場、そしてニュースレター「結びこむ」が、コムケア活動を支える3つのメディアです。これらを有機的に組み合わせることで、コムケア仲間のつながりが深まっていくと考えています。

「結びこむ」の制作も、コムケア理念に基づいての「共創型」にこだわっています。トップページの制作は、コムケア仲間に一任しています。まだ発行頻度は少なく、今年度は3回の発行でしたが、発行頻度を高めるように仕組みを考えていく予定です。

■ホームページ

本プログラムは基本的に情報を公開していく姿勢をとっているため、選考過程や支援先プロジェクトの動きなどもできるだけホームページに掲載しています。

ただ、実際にはホームページのメンテナンスには時間がなかなか割けずにあります。ホームページへの記事提供をコムケア仲間にも働きかけていますが、なかなか難しいです。

ホームページを持っていないコムケア仲間には、このホームページの一角を使ってもらおう構想もありますが、最近では簡単にホームページが開設できるようになりましたので、この構想は見直すことにしました。むしろ、コムケア仲間のホームページとどう結び付けていけばいいかがこれからの課題です。

今年度の新しい試みとしては、コムケアフォーラム2004東京の開催に際して、専用のホームページ（書き込みができるウェブログ方式）を開設しました。残念ながら、多くの人の書き込みは実現しませんでした。情報共有の手段としては効果的でした。

■コムケアフォーラム2004東京

昨年のバザール型フォーラムとは全く違ったスタイルのフォーラムを開催しました。

昨年度のコムケア活動のテーマは「つなぐ」でしたので、バザール型フォーラムとしましたが、今年は「つくる」をテーマに、参加者と一緒に企画するとともに、フォーラムの場で具体的な新しい物語（プロジェクト）が生まれることを目標にし、じっくりと議論しあう「共創型フォーラム」にしました。

専用のホームページとメーリングリストづくり、事前に参加者同士の意見交換を重ねたり、テーマごとのミーティングを行ったりした上で、当日（2004年4月24日）は約60人が参加し、6つのテーマを発表した後、6グループにわかれて議論し、最後にそれぞれから具体的なアクションプランを発表しました。

フォーラム終了後もメーリングリストとホームページは継続し、メンバーも増やしながら発展しつつあります。この集



まりを母体に、コムケア仲間のゆるやかな組織として、コムケアアソシエイツの仕組みを検討していく予定です。

■バザール型コムケアフォーラムの展開

昨年度開催したバザール型コムケアフォーラムは、その後、少しずつ波及しています。コムケア仲間でもある、子育て学リサーチ・ネットでは、昨年度11月に開催した子育て学フォーラムを、まさにバザール型で開催してくれました。

また、同じくコムケア仲間のNPO法人まちのよそおいネットワークが中心になって、5月に山口市で開催するコムケアフォーラムもバザール型です。

*今年度は対象期間が短かったこととイベント支援プログラムがあった関係で、地方での交流会は開催されませんでした。コムケアフォーラム2004 in 山口は、5月開催ですが、第3回コミュニティケア活動支援プログラムの枠組みの中で開催します。

■インターンシップの受け入れ

淑徳大学からの要請に応じて、2003年8月に、4人の学生をインターンシップとして受け入れました。

時期的には、資金助成プログラムの募集と予備選考期間でしたので、主に予備選考作業にかかわってもらい、それを通じて、最近のNPO活動やコミュニティケアに関する実態を学んでもらうようにしました。

コムケアセンターは、その気になれば、さまざまなNPO活動との接点ができますが、それを活かしていくためには、インターンの姿勢や意欲に大きく左右されます。今回の体験を通じて、逆にインターン活動の問題点なども見えてきましたが、学生と市民活動をつなげていくためには、インターンシップの受け入れ体制を整備していくことの必要性を感じました。

5. プログラムへの評価

資金助成団体対象に、期間終了後、活動報告書と共に、この

プログラムの内容や運営に関するアンケート調査を行いました。主な意見を紹介します。

■資金助成プログラムに対する評価

- ・ 助成金を出す側と受け取る側という従来の形を変えていこうというメッセージをしっかりと受け止めました。
- ・ 活動分野を（すべて「大きな福祉」）として捉えて特別限定しないのがいいです。
- ・ イベント企画の助成と、継続プロジェクトの助成は助成当初から明確に分け、そのことを明示しておいた方が良かったと思いました。
- ・ 活動を進める上でもっとも大きなウェイトを占めかねない人件費について多くの助成金がこれを充当できないものが数多くある中、柔軟な用途を原則とする助成活動については実態を踏まえた素晴らしい体制かと思います。
- ・ 一般の助成金は制限が多すぎて、特に新しくスタートしたばかりの団体にはかなりハードルが高くなってしまいましたが、コムケアが新しい団体にも可能性を！という意味で今後も取り組むのであれば、とても良いと思います。

■資金助成以外のプログラムに対する評価

- ・ MLの活用など「金の切れ目が縁のはじまり」というコムケアの姿勢に賛同します。
- ・ 興味のある内容は多いのだが、今回の活動以外の自分たちの抱えている仕事も多くなかなか参加や応えることができない。
- ・ 地方に住んでいると参加しにくいし、メールリストだけの情報では、あまり仲間作りはできませんでした。
- ・ 『結びこむ』等「互いに気遣いあう」コムケアの理念を世に周知させる手段として、良い活動だと思います。
- ・ イベントを通じての交流や情報交換はとてもよくできていて、興味深いと感じています。ただし、交流以外のテーマ性が乏しいという感じがしています。
- ・ "困っているが誰に尋ねたらよいか分からない"といったことが起こりがちなので、何でも相談に乗って頂けるのはとても助かります。

■公開選考方法に関する評価

- ・ フェアで納得のいく選抜方法だと思います。反面、コムケアセンターが出している「大きな福祉」を目指す団体は選ばれにくいと感じました。
- ・ 30の団体の人に「会う」ことができたのが何より良かった。時間に余裕があれば、選考会以外の時間でもっと交流がしたかったと思う。
- ・ とても良いと思いました。しかし、一方では他の団体との競争のような感じもあり、複雑な心境でもありました。

た。仕方がないかもしれません。選考方法は難しいと思います。

- ・ もっともユニークな点の一つですね。もちろん、賛否両論あるはず。たとえばあまり多くの方に馴染みのない分野や、イメージしにくいソフト領域の事業の場合は、なかなか肯定的な投票に結びつきにくいのではないかと思います。
- ・ 選考委員の投票数だけでなく、実際に行われる活動内容に踏み込んだ形で評価基準へ盛り込んだ方が良く思う。
- ・ 大変面白い方法だと思います。プレゼンテーションは、団体としてプロジェクトに対して意気が高まるものでした。選考の透明性も高く、また、参加することによって、他団体の様々な活動も勉強になりました。そして、なによりも、私たちが活動する上で、選んでくれた皆さんのためにも頑張ろうという気持ちにさせてもらいました。

■「大きな福祉」についての意見

- ・ 助成先を見ても明らかのように、参加されている人が「福祉のプロ」「市民活動のプロ」ばかりで、目標とされている活動分野を超えた交流を進める上で、そもそものパイが限定されているように思います。これを打破するためにも、プロ色の強い「福祉」という単語を前面に押し出すのはあまり得策ではない気がします。
- ・ とても難しそうですが、実はもっとも自然で理想的な形だと思います。でも、「大きな福祉」という言葉自体は、本来の理念をイメージしにくいかな・・・もっと何かふさわしい言葉がありそうな気がします。
- ・ 趣旨に賛同します。今の社会、憤みと助け合いの精神により再建する必要があると考えているからです。ただし、理念の幅が「大きい」ことは、かえって焦点を絞りにくくすることがままあります。その点が工夫のされどころかだと思います。
- ・ 「大きな福祉」に賛同できます。特に昨今個別の福祉活動が盛んですが打ち上げ花火で終わるものも多くあります。個々でなく広く捕らえる活動こそが福祉には大切とおもいます。

■「共創型相互支援の輪づくり」についての意見

- ・ 「つなぎあう」ということが目的になると、散漫なネットワークとなりやすいことが懸念されます。その点、このネットワークでは何が得られるのかを明確にすることが肝要だと思います。
- ・ ビジョンとしては、とても共感します。ただ、中央から遠距離であるということが、直接的な仲間づくりには、大きな壁であると感じています。ネットも普及していま

すが、やはり「フェイスtoフェイス」の意見や活動の交換が大切だと感じています。

- ・ さまざまな活動の中で、自分達だけではプロジェクトが遂行できない場合、他の団体の活動を利用・活用またはヒントにする事で、プロジェクトが達成できるのではないかと思います。また、それぞれの団体が、プロジェクトその他を達成していく事で、より大きな福祉が見えてくるのだと思います。また、一般の助成は、資金だけ提供されてその後のつながりなどはないので、このオリジナリティ性の高い活動は、とても良いと思っています。

■プログラムに対する提案

- ・ ホームページ上で成果物の発表会をしてはどうでしょうか。ネット上文化祭のような感じで、モノを作ったところは写真などを展示し、まちづくりやイベントを行ったところは、動画などを配信し、ページを訪れた人がブースを眺めて回ることが出来たら、プロジェクト紹介の良い機会にもなるし、楽しいのではないのでしょうか。
- ・ 地方の団体が実践的な課題で交流し、仕事おこしにつながることでできる仕組みがあれば良いと思います。
- ・ ぜひ継続事業として本プロジェクトを続けたいので、継続で資金助成ができるような形だと、より大きく、より本格的に活動ができるため、必要に応じて継続事業を認めるプログラムがあると、より現場にとっては助かります。
- ・ 単に助成金をもらって終わり…というのではなく、その後のつながりに主を置いているコムケアの活動をとても素晴らしいことだと感じています。もう少し活動が広まってきたら、分野毎にまとめることで、更に深くかわりをもつことができるような気がします。

6. 資金助成プログラム選考委員講評

(1) 選考委員の講評

■片岡勝さん（市民バンク代表）

今回、選考された団体とテーマを見ると、良い意味で遊びの要素が加わってきたように思う。

教育、福祉、地域、農業、国際、どれをとっても現代が抱える大きなテーマばかりだ。そして、重い。だけど、そこにアート、デザイン、ファッション、写真展、駅伝などを組み合わせると、なんとなく参加してみようと思うようになる。更にIT活用で気楽さを増す。

私自身、大学闘争から35年、社会の課題解決をライフワークにしてきたものにとって、多様なスタイルで同じミッショ

ンを掲げる仲間が増えてきたことに感心してしまう。情報化社会は多様性を条件として創造性を競い合う場だ。思い出すのは内橋克人さんから「共生の大地」で取材を受けたときにされた質問だ。「資本主義に変わる社会でも競争は残ると思うが、片岡さんは、それは何だと思うか？」と言うものだった。即座に答えたのが「創造性の競争が新たな活力を生む社会になる」。

皆さんの活動と、コムケア基金が、そんな社会形成を加速することに貢献すると思えた。

■北矢行男さん（多摩大学教授）

今年は、残念ながら、最終選考会に参加できなかったの、書類審査の段階で感じたことを述べてみたい。

結論的に言うと今年のプロジェクトには、ソシオ・ビジネス的アプローチが増えていることが特徴だったように思われる。例えば、「路上生活者仕事起こしプロジェクト」、「障害者の経済的自立を支援する共同作業所」、「畑のフリースクール」手づくり工房&卵ひろい牧場"整備事業"、「障害者雇用の場としての"まちかど図書館事業"」などがその典型的なプロジェクトであろう。昨年の講評で、社会問題解決型のビジネスとして自立しうる可能性を持っているにもかかわらず、ひたすら援助に頼る傾向があることに苦言を呈したが、その点、今年は大きく変化したようである。

これには、スワンベーカーリーの展開で障害者でも月10万円の収入が可能なことを証明し、社会問題解決がビジネスとして成立することを身をもって示した小倉昌男氏の取り組みが注目されたことも大きく影響していると思われる。しかし、ソシオ・ビジネス的展開の増加は、単なる助成支援を越え、コンサルティングセンターとして機能してきたコムケアセンターの3年間にわたる地道で粘り強い活動によってもたらされたものだといえるだろう。

今年のプロジェクトのなかで、是非、触れておきたいことがある。それは、日本手話によるろう児教育を主導する龍の子学園の取り組みである。日本のろう児教育は、文化省のもとで口話教育が行われている。健常者の口の動きを読み取ることを中心とする教育である。しかし、生まれた時からろう者の人にとって、自分の頭の中に全く存在しない概念を理解することは限りなく困難なことである。そこで幼いろう児が素直に入っていける日本手話と書記日本語によるバイリンガル教育が重要になってくる。こうして、ろう児は自分の言葉を持てるようになってくる。

このような取り組みは、多様な能力と個性をもった子ども達を育てていくアプローチとして大事なことであり、それは障害児対策を超えた教育の本質に係わる問題である。本来、これへの取り組みは、文化省にとって存立を問われるテーマだと思われる。コムケアの精神は、お上に頼らない自立にある。ここは市民の手で、新しい動きを作り出していくしかな

いだろう。

最後に佐藤修さん、3年間ご苦労様でした。貴方の活動に心から敬意を表します。

■木原孝久さん（住民流福祉総合研究所代表）

NPO助成に関わる選考に参加させていただく楽しさは、そこでNPOの最新のトレンドを発見できる点にある。

これぞと思われるグループに共通した「福祉という営みの」特徴を敢えて挙げれば、「QOL」となるのか。豊かな時代に入ったわが国では、福祉もまた、相当高レベルの質が求められるようになってきている。その質の中味が多岐に渡っている。

具体的には、例えば「福祉の」アート化が挙げられる。福祉の営み、あるいは社会活動を文化芸術にまで昇華させた活動が「目白押し」である。そうすることで、福祉なる営みの臭味が消えていく利点もある。また、介助犬の服づくりとか、多動性の障害児が遊園地で楽しめるような仕掛け作り、院内に芸術的環境をとといった、今まで閑却されていた部分、「ちょっと贅沢」と思われていた部分にまで、NPOたちの活動対象領域に入ってきた。

「癒し」というテーマ自体が、豊かな時代の福祉を象徴しており、NPOにもこのたぐいの活動が多いが、その延長で、死後の福祉にまで、私たちの目が向かい始めた。本当の安らぎはこの部分が充足されてからだ、私たちは思い始めている。

これまで障害者福祉といえば「ふれあいまつり」をたまに開催するとか、せいぜい外出支援がメインの活動だったが、ここに来て基準が「経済的自立」に絞られてきた。それも、ただ就労の機会をとというだけでなく、古書やパソコンをリサイクルして住民に安く提供するといった、社会の隙間を埋めるような社会貢献的ビジネスを開発するようになってきている。

今まで福祉の対象者であった人たちが、逆に担い手になっていくというのも、新しい動きであるが、知的障害者本人がグループを作って、まだ施設に入所している仲間を地域社会に戻させていく、その先頭を切るまでになった。ホームレスの人たちが仲間が仕事に就ける支援をするのもしかり。セルフヘルプグループといえば、当事者の家族や支援者で構成したものばかりだったが、今や本人自身がグループをつくり、発言をし始めた。これで福祉に本当の「革命」が到来するかもしれない。

他にも、セカンドオピニオン容認の病院を発掘とか、地域福祉計画を市民主体でつくる、福祉施設の第三者評価を実行、その情報公開など、これまで専門家が占有していた領域にまで素人の市民が進出してきた。これも一つのトレンドと言えるだろう。

■高橋流里子さん（日本社会事業大学教授）

社会が大きく動いている様、そして、私の専門である社会福

社分野に大きなうねりがあることを2年続けて参加した書類選考と公開選考会を通して実感しました。多種多様の活動があること、そして、昨年にもまして従来マイノリティグループであった障害者や高齢者等当事者が活動する姿から伺えたのです。

このような動きが社会を変革する原動力になるであろうとも感じました。同時に、これらの活動によって社会はどんな影響を受け、どんな方向に向かっていくのだろうか、どんな社会を"創る"のだろうか、とも考えさせられました。法人化しているか否かに関わらず市民活動としてのNPO（非営利組織）の社会的意義についてです。

市民活動には発想と活動の柔軟性、主体性、自律性、そしてボトムアップの思考・行動、クリエイティビティという官僚制の弱点を越えるところに意義が求められてきたと理解しています。そして、活動が人間にとって有益な社会の形成に役立つのだと考えています。

書類や選考会という限られた資料からですが、これらの意義に関して気になる点がありました。

確かに個々の活動テーマは一見目新しいのです。しかし、良くみると旧態依然の発想・手法と思われるものがあり気になったのです。

例えば、当事者主体の活動がある一方、無意識であると思われるが、高齢者や障害者を対等な市民というより活動の対象にする保護・パターナリズムの思考が目につきました。

また、"住民による"のタイトルとは裏腹に住民はお客様か指導の対象というトップダウンの住民不在の手法や福祉制度や介護保険制度内の対応可能と思われる事業への助成申請があったような気がしました。つまり、今までの行政の発想や手法とどこが違うのだろうか、辛口だが、担い手が行政から市民に移っただけなのではないか、ということです。

官僚制度の弱点を批判して生まれたはずの市民参加や市民活動が、これらの弱点を内在化してしまうのではないか。そうなれば衣を着替えるだけであり、社会の変革も難しい。

今回の応募された様々な活動のすばらしさや意義を実感し、活発化する市民活動にエールを送るのである。しかし、同時に、それに潜む危険性の方も見ていかななくてはならないのではないかと感じたのです。

■町田洋次さん（ソフト化経済センター理事長）

年毎にビジネスプランは進化していることを実感した。3年前なら社会性の強いビジネスプランをつくることなど、まだ始まったばかりで、机上のプランが多かった。

こうした事業は目前に「解くべき問題」があり、やむにやまれぬ気持ちでその解き方を考え、ビジネスプランにして実行するものだが、目前の問題が希薄、ただビジネススクール風のプランを作る風潮が蔓延し、私は苦々しく思っていたのである。

これは相変わらずの知識病で、こんな精神では社会問題など解けるわけがない。こうした不満から、社会事業に成功した事例を研究し、何が大切なのかを考えた時期があったが、私が発見したのは、

- ①原体験、これは現状に対する不満で、うらみでもある、
- ②それを語り、共鳴者を集める力、
- ③やってしまった後で考える精神、未知の領域なので机上でいくら考えても進まない、それなら走りながら修正して行くという現場主義などであった。

「3年の進化」とは、そうした方向に行っていることを指している。3年でデスクプランから現場主義のプランに変わるのだから、変化は急である。これは現在では希な成長現象で、要は社会事業は成長産業になったのである。

今回提示されたプランも、成功の要件を備えたものがたくさんあった。作業所での自立した経営を目指す事業は、ヤマト運輸の小倉昌男さんがブレイクスルーした後、社会に広く広がり始めたことを思わせるものだった。龍の子学園のろう児手話教育は本邦第一号で、創造的である。佐倉こどもツテーションは、素人がミュージカルを作ろうという地域の文化事業だが、楽しそうで、はつらつとした感じで、関係者が中年女性で明るいのがよい。

選考会でベスト15に選ばれなかったのも含めて、ここにあるのは先端的な事業プランである。まもなく社会の方がこのプランに追いつき、自発的な成長を始めるだろう。

■松原優佳さん（市民セクターよこはま）

今年もまた、申請書を通して、たくさんの事業プランに出会うことができました。今回選考からもれてしまったプランの中にも、「これはぜひ実現して欲しい」「こんなことを考えている団体には、コムケア仲間に入ってきて欲しい」と思ったものがいくつもありました。その一方で、「果たしてこれが、この目的や目標のための、最適な方法だろうか？」つまり「この部分をもっと詰めれば、もっとよくなる」「コムケア以外で、助成を受けられそう」「こういうアプローチをすれば、助成を受けなくても実現できるのでは」などと思われるものも少なからずありました。公開審査に参加された皆さんも、同じように感じられたのではないのでしょうか。

ここから言えるのは、「助成を申請して、審査を受けること」は、自分たちが考えている事業のプランを、外部者の目に触れさせる機会でもあるということ。そして、そのフィードバックを得られれば、プランをよりよいものに改善するチャンスにもなり得るということです。

幸いにもコムケアのプログラムでは、選考からもれた団体は、その理由やアドバイスなど、事務局からフィードバックを受けることができます。助成を受けるプロジェクトでも「ここをこうすれば、もっとよくなる」と思われる点など、個別意

見交換会などを通じて、アドバイスを受けられることになっています。助成を申請された団体の方には、ぜひともそれらのフィードバックを受けて、よりよいプロジェクトにして実現していただきたいと、期待しています。

また、ひとつ提案なのですが、来年以降、「助成金」がなくなっても、助成金の申請のようなイメージで、コムケアの「共創型相互支援の輪」で、事業の企画書を持ち寄って、お互いにチェックし、アドバイスしあう、相互カウンセリングのようなことをしてはどうでしょうか。外部からのアドバイスを受けて、事業をよりよいものにしていく機会は、他になかなかないと思います。支えあいのひとつの形として提案します。

(2) 資金助成プログラム予備選考委員感想

■橋本 克己さん（特定非営利活動法人彩星学舎）

送られてきた50団体の申請書を手にとって見て、大変なことに参加してしまったなあ〜と思ったのが最初でした。予備選考の締切は特定非営利活動法人彩星学舎ビックイベント8月31日演劇公演に向けての時期と重なっており、正直引き受けなければ良かったと何度も何度も頭を抱えていましたが、50団体の思いと向き合う決心をして取り掛かりました。

私が活動している特定非営利活動法人彩星学舎は、1999年4月に埼玉県さいたま市に開校したフリースクールです。不登校や心のつまずき、学習障害や多動傾向・軽度の知的障害など福祉と教育の狭間に置かれ十分なサービスを受けられず、理解と支援が必要な児童・生徒に学びを保障しようという理念を掲げ活動を展開しております。そして大切なビジョンがもう一つ、性別・年齢・地位・名誉によらない協働によるコミュニケーションの実現＝「学びのコミュニティ」を目指し様々なイベントを行っております。そのイベントの柱の一つとして夏季特別講座「演劇公演」があります。彩星学舎在籍児童・生徒、スタッフ、在籍児童・生徒保護者、ボランティアスタッフ、地域、関連機関を巻き込み、埼玉全域・東京・千葉・栃木など関東一円から200名近い観劇者を合わせ約300名規模のイベントとして毎年規模を拡大しながら実施してまいりました。彩星学舎は人・金・モノに余裕があるわけではありません。いかに知恵を使って実施することができるのか、毎回スタッフが頭を抱えながら実施してまいりました。今回私自身行き詰まっていた部分があり、正直今まで経験したことを行なうだけで、新しい積み重ねは期待できないだろうと思いながら実施に向けて準備を行っていました。自分の中の予定調和された中での活動は新鮮さがなく、活動に対しての意欲も高まらず、正直イベントの中止すら考えたほどでした。ただイベントを行なうだけではスタッフだけではなくそこに集う人たちにとっても発見・気付き・刺激のない・混沌がないだろう。ただやる…だけでは仕掛けとしては不十分ではないか〜彩星学舎のミッションは何なのか〜何がしたい

のか〜もう一度原点に戻る大切ではないかと考えていました。

そんな時に届いたコミュニティケア資金助成プログラムの選考予備選考50団体の申請書類に目を通してみると、自分にとって多くの発見・気付き・刺激があり、混沌が起きました。こんな活動をしている団体があるのか〜こういう着眼点があるのか〜ドキドキ・ワクワクするプロジェクトではないか〜これはどういう意味を持つ活動なんだろうか〜など50枚の申請書類は新しい刺激を私自身に与えてくれたのです。

他の団体が作成した申請書類をこのような形でじっくり読むのは、初めての経験だったのですが非常に興味深かったです。前述しましたが彩星学舎でも人・金・モノに余裕があるわけではなく常に慌ただしい中で活動しております。そんな余裕のない状況は申請書類からも感じ取ることができましたが、貧乏自慢や不幸自慢についつい目を奪われがちな自分に傾向に気付き、すべて見直しました。プロジェクトを実施する為に…というコムケアの趣旨をしっかりと捉えているかどうかを見てみると様々なポイントが見えてきました。

①ビジョナリー経営の徹底

ちょっと古い言葉かもしれませんが、ビジョナリー経営とは何か。自社の企業理念や経営哲学に基づいて経営を行なうことです。言い換えれば、すべての経営活動を企業理念や経営哲学から展開していくことです。何を言っているんだ〜自分たちはNPOだ、市民活動団体だ、と言われるかもしれませんが、しかし人が集い、お金が動き、モノが必要となれば大小関係なく経営という感覚は必要不可欠です。ここの部分は絶対外してはいけない部分でしょう。そんなことは分かっているが、そんなことをやっていると潰れてしまう〜もっと具体的な改革を推進すべきだとおっしゃる代表の方は多いと思います。もちろん具体的な改革は必要ですが、それをどんな方向で進めていくのか、あるいは何を基準に進めていくのかが明確でなければ、それは小手先だけの効果のないものになってしまいます。つまりビジョナリー経営とは、大変混沌としている社会状況の中で、遭難することなく航海していくために、「羅針盤」をもった経営を行なっていくことです。その「羅針盤」こそが、各NPO、市民団体の経営理念、哲学、ビジョンなのです。船乗りなら誰でも「羅針盤」のない船に乗りたくはないのと同様に、目的地や進むべき方向が不明確な組織には、誰も在籍したくありません。

ただ単なる数値目標や達成値を「羅針盤」ととらえない視点が大切です。思いだけが先行してしまい、五里霧中の状態が続けば努力は疲労感に変わりより悪化した悲惨な結果がそこにあるかもしれません。「あるべき姿」と「現状」を明確化するときに「羅針盤」を使い、思いのパワーをどこに向けていくのか〜この徹底をしている企業（例：TDLが有名）はそこに集う人たちがはっきりとした目標を持ち活動しています。

思いは充分伝わってきました。しかしこの部分をポイントとした時にどこに進んでいくんだらうという船を沢山感じました。明確な「羅針盤」を後押しする資金援助なのかどうかをじっくり考える機会となりました。

②ビジュアライズ化

実際に50団体の申請書類を見たときに、「羅針盤」がしっかりあるNPO・市民団体はありました。非常に参考になるところがあり勉強になりました。では「羅針盤」をみんなに伝える為の方法～プロジェクト～はどうかというと、物足りなさを感じました。限られたスペースに「羅針盤」を表現し、どの方向に進んでいくのか、そのために何をするのか、何が必要なのか、何が問題でそのための対応策はどう考えているのか等記入していくのは確かに難しいことかもしれませんが、ここに書かないと伝わらない事を痛感しました。このスペースを通して記入した内容が読み手の頭の中で映像化される(ビジュアライズ化)表現方法を学んでいくことがいかに大切か感じました。プロジェクトを進めていくときに誰に読んでもらいたくて、誰は読まなくてもいい何ていう事はないと思います。社会へ向けて発信していく方法を学んでいく重要性を改めて捉え直していただきたいと思いました。

では偉そうに書いていて自分はどうかというときとまだまだ未熟で、勉強していかなければなりません。今回申請書類を見る立場に廻り、自分の団体を客観的に見ることができました。今まで述べてきたようなことは散々いろいろな所で教えていただいたことでしたが、あまり実感できなかつた事でもあります。このような機会を与えていただき50団体の申請書類を見る過程の中で私自身学ばせていただきました。本当にありがとうございました。次回は申請書類を書く方に廻りたいと思います。

■坂谷信雄さん(東京都職員研修所(当時))

応募された方々は、色々な意味で、「自由」な人々だということです。

ただ、その意味は、前まで、自分自身が考えていた「自由」の概念とは随分違います。都会は、周囲の眼を気にすることなく、煩わしい近隣関係なしで生活できます。それを、私は「都会ゆえの自由の魅力」と考えていました。

煩わしい近所や周囲の眼を気にして生活することが、日本人の独立心を奪い、集団にとけ込まなければ疎外される恐怖を与える。近所や親戚の子が有名大学にはいれば、比較され、自分が本当に何をしたいのかわからないまま、受験・就職・結婚・そして、家を買ひささやかな出世に悪戦苦闘する。

「こうした不自由さ」は、日本人が「個」として自立してゆくには、制約要素だとおもっていました。それが干渉されない大都市での生活は、「自由」。ムラの社会の「不自由」に対するアンチテーゼとして、まさに「フリーター」という生き方を選

ぶ人々が増えた背景とも思います。

しかし、「自由」には、二種類あります。「束縛からの自由」と、「自己実現に挑戦する自由」です。「束縛からの自由」これも大切ですし、今もこれがないために、世界中で多くの人が苦しんでいる実態は無視できません。でも、「束縛からの自由」が、単に「束縛されない」だけを意味するのでは、「空っぽの自由」です。「自分自身が何を望んでいるのわからない」のに、「自己実現の自由」を享受できるはずはありません。また、「目標」があっても、それが「人と比較して自分の優位であることを示すための富・学歴・社会的地位・名誉」が目標であるなら、その人は自由どころか、社会的しがらみの虜となっていると言えます。

今回の予備選考を通じ、日々、生まれている社会問題に自らの使命を見つけだし、挑戦しようとする意欲的な人々が世代を問わず増えていることを学びました。こうした人々こそ、これから数多くでてくるであろう「自己実現できる自由」の体現者であり、これからの社会の「先駆者」となる人たちだと思います。

先駆者の宿命として、様々な試行錯誤があり、困難、失敗も多々あることと存じます。末筆ながら選考の結果の可否に関わらず、応募された方の今後のご活躍をお祈り申し上げます。

■瀬谷重信さん(株コラボレーション経営研究所代表)

北海道から九州まで広く寄せられた予備選考の50件の助成プロジェクトを担当しました。企画者の熱意を感じながら、最終選考候補として特に推薦、推薦、検討、見合わせの4レベルに評価することは時間以上に悩み、苦しみ、選考の難しさを心身ともに感じたプロセスでした。プロジェクトの内容が高齢者、障害者、子供を対象にした支援の企画から、新たなビジネスやコミュニティを創りあげようとする企画、更には新たな社会の仕組みづくりに挑戦しようとしている意欲的なテーマにいたる広範、多様なもので、選考の難しさとともにNPOの意識と行動の高さを強く感じました。

これらの選考過程から今後のNPOのあり様についての2つの想いに至りました。

応募から最終選考にいたるプロセスは助成金を得ることが当面の目的でしょう。しかし、その本質は「成長のための学習のプロセス」であるとの考えが大切であるとの想いです。自分達の組織や活動の意義を再評価しそのもとでのプロジェクトの目標、実現時期、達成方法、資金計画などの実施計画とプロジェクトの推進管理の仕組みがしっかりしてこそ、プロジェクトは実績をあげそしてNPOは成長していく。このようなプロセスで創りあげられた企画は社会性、先進性、発展性の面で説得力を持ち評価を得ています。NPOは志や問題意識は極めて高いのですが、プロジェクトを企画実行するうえで人材、ノウハウを単独でカバーすることは困難であります。この面でのアドバイザーとしてのコムケアセンターの役

割は大きくなっていくことでしょう。

第2の想いは「コラボレーション（協創）による企画、実践」の重要性です。

今回の企画でも障害者と健常者、若者との組合せによるアイデア、他の組織との連携による実施など異質な交わりによるプロジェクトがいくつもありました。もはや自分達単独でことをなすには知恵、時間、資金など限界です。目標を共有し、「3人寄れば文殊の知恵」のとおり、それぞれが持っているノウハウ、技術、などのコアコンピタンスを活かしあう

コラボレーション志向のプロジェクトが企画、実践の両面で求められます。そのためにはNPOそれぞれが自分達の特色、得意分野、ノウハウなどコアコンピタンスを持つことが必須となります。

■藤澤浩子さん（よこすかパートナーシップサポーターズ）

50件の申請書の中から規定どおりの件数で選定せねばならないというのは、やはりとても大変な作業でした。けれども、一度に50の申請書を拝見すると、いろいろ気づかされることがありました。例えば、すぐれたキャッチコピーや、シンプルな主張、読みやすく整理された書式は、多くの申請書を限られた時間で読んでいく選考担当者にとってはとても有効に作用すること、反対に優れた専門性、溢れるやる気だけでは一歩足りないこと、などです。

事務局より提示された5つの評価基準に基づいて選考しましたが、基本的には、コムケア「大きな福祉」-地域福祉に寄与すること、具体的な行動・実践活動か、それにつながる取り組みであることを重視しました。まとまった金額を申請しやすいため、機材購入中心の申請が多くありましたが、実践活動のために必要かどうかで選定しました。一方、学習会、セミナー、シンポジウム開催費用として、主に講師招聘・謝金として資金の大半を支出する計画が多数ありました。実践活動との関連をよく見て判断する必要はあるかと思いますが、学習活動は基本的には受益者負担とすべきであるという立場で選定しました。実践活動の評価件数が少なければ、学習活動にも枠が残されたかもしれませんが、実際のところ、その枠は残りませんでした。

一度に多くの申請書を目にしてみて、評価基準以外に人の心を惹く説得力のある記述というものがあるということを実感しました。申請書の書き方ノウハウなどで伝えられるようなものではなく、やはり日頃の実践の積み重ねが反映されるのだらうと思います。コンテキスト:文脈こそがすべて、という感じでしょうか。大変勉強になり、良い機会を与えていただいたことに深く感謝いたしております。

■下山浩一さん（コミュニティアート・ふなばし 代表）

今回の予備審査に当たって最も重視したことは「コムケアで助成すべき事業か」という点である。コムケアが掲げる

「大きな福祉」というコンセプトに合致するか、という点はもとより、助成が「本来届くべき対象」に届くように配慮した。

具体的には、

- ・規模が小さい団体、活動歴が浅い団体を優先的に検討した。
- ・ホームレス支援、セクシャリティ、在日コリア人支援等、支援に関して社会的なコンセンサスが確立しているとは言えない分野の事業は優先度を高めた。
- ・環境、福祉（特に介護一般）、スポーツ、レクリエーション等、助成制度が社会的に確立している分野の事業は、優先度を低くした。
- ・活動歴が長い団体、規模が大きい団体、企業の支援によって活動している団体、NPO中間支援組織の優先度は低くした。「先輩」市民セクターとして、資金調達に工夫をいただきたい。
- ・助成金申請理由が単にPCをはじめとする機器の取得になっているものは推薦対象から除外した。

総じて、首都圏以外の応募が多く、市民活動の広がりがビビッドに伝わってくる選考となった。が、同時に、「審査員」が要求される「市民活動に関する知見」は非常に高度になっており、責任を感じた。

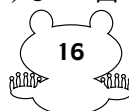
■長沢恵美子さん（経団連1%クラブ事務局）

どの申請書からも、コミュニティの課題を解決するために、自分たちが立ち上がろうとする情熱が伝わってきました。こうした一人ひとりの市民の動きが日本を変えていくことができるのだと、心強く思いました。コミュニティの中で、さまざまな人が集まれる場を求めているものが多かったという印象があります。場の持つ求心力は、コミュニティケアにおいて大切な要素なのかもしれません。かなり迷いましたが、最終的には、新しいコミュニティケアのシステムを提案しているプロジェクトに高い点をつけました。できるだけ、コムケアの多くの仲間が共創する際の参考になると思うものを選んだつもりですが、そうなっているかどうか・・・。

■小山美代さん（福祉関係の研究者）

我が国は、中央集権国家から自立分散協調型のネットワーク社会へと意向しつつあるが、その方向感を支えるひとつが、コミュニティケアの活動支援であると思う。昨年の提案に比べて、一段と内容が充実してきている。特に、NPO法人からの申請が増加しており、我が国でNPO法人が着実に根をおろしていると実感した。地域密着型のNPO法人の活動は、まちづくりだけでなく地域全体にも新しい活力を吹き込むように見え、コミュニティケア活動支援はNPO法人の芽を育てるために、重要な役割を担っている。

ところで、「高齢社会」と「少子化」は背中合わせというが、国の施策や社会の関心事はともすれば、「高齢社会」に目が向



いているのが現実である。

今年も「子育て支援」をテーマにしたユニークなものが多く、感度のよいコムケア仲間からの提案を心強く感じた。私たちは、日本の未来を背負う子どもたちを、社会全体で健やかに育て見守ることを忘れてはならない。

■大川新人さん（NPOマネジメントコンサルタント）

（よかった点）

商店街との連携を企画しているプロジェクトがあって、よかったです。NPOはテーマ型が多く、地縁型の団体と連携するケースが少ないからです。

個別では、WAPのホスピタルアートプロジェクトの目新しさが、印象的でした（最終選考会で上位15団体に選ばれました）。

（よくなかった点）

多くの申請書は、新鮮味が乏しかったです。先駆性のある、斬新なアイデアを持ったプロジェクトが少なかったことが、残念でした。想像力をふくらませて、社会や地域に必要な、いままでにない、新しい発想のプロジェクトに挑戦してもらいたいと思います。

■飯沼勇一さん（機アドエンジニアーズ）

予備審査を引き受けては見たものの、こんなに辛いとは思わなかった。というのが率直な感想だ。勿論読み込むことも大変だったが、何よりも「審査をする」という行為自体が厳しかった。

大部分の申請書類にはそれぞれの団体の情熱が溢れており、場合によっては小人数ではあるが活動への本当の理解を訴えるものもあった。

一通り下読みをした後、審査の目が揺らぐのを感じた。自分の中の審査軸が一定していないのだと思い、軸を揺らがないために最終判断を一日で行うことに決めた。

もう一つ決めたことがある。「大きな福祉」の視点を決して失わない態度を自分自身に言い聞かせることだ。それが今回の最も重要課題だと判断した。

できればどの申請書類にも支援したい。そうした思い入れはできるだけ排除し、純粋に「大きな福祉」という視点で判断したつもりである。

それにしても、事業型NPOを視野に入れている団体が増えてきたのには目を見張った。新しい社会モデルの創出をめざしているものもあった。

溢れる情熱に頭が下がる思いと同時に、日本も捨てたものではないと実感した次第である。

■淵野康一さん（東レ経営研究所）

1. 気遣い合う社会づくり、支えあう関係づくりの現場を見たくて、会場に足を踏み入れた。少し遅刻したら満

席で熱気ムンムン。辛うじて空いた席を確保。それほど200人以上の人が聴き入っているのにまず驚く。

2. 予選を突破した30の市民活動グループの発表はどれも個性があり、熱意があり、感動があった。甲乙つけ難く、5つに厳選するのは至難の業。気軽に審査員を引き受けたのを一瞬後悔した。
3. でも、公開でかつ参加者が選ぶ方式は公明正大で素晴らしい。気を取り直して？できるだけ異なる分野から感動のより大きかった活動をひとつずつ選んだ。
4. 審査後の交流会ではみんな元気でいい笑顔をしていた。こういう人たちが各地域をそして日本を変えていくんだなあと実感した。なにか救われた温かい気持ち会場内に充満していた。これこそ愛情、慈愛に満ちた雰囲気かも。
5. 参加してよかったと思う。後味のいい映画を見た後のようなさわやかな充実感が残った。おかげさまで、私の教育ビジネスの原点を省みるヒントをお土産としてたくさんいただいた。参加の機会と元気を与えていただき感謝、感謝。

■井上英之さん（ソーシャルベンチャーパートナーズ・東京ベイ）

今年は、選考に参加させて頂きまして、ありがとうございます。

私は、「スタイル」という社会ビジネスや事業型NPO向けのビジネスプランコンテストを開催していたのもあって、少し多く約70件ほど拝見させていただきました。

(<http://www.etic.or.jp/style2003>)。

審査側といふとなんだか偉そうですが、やはり、こういうプランを見ているものすごく勉強になりますし、常に審査する側が問われる部分があるので、一つひとつ真剣に読ませていただきました。

感想です。

1) 全体：

コムケアは、スタートアップ支援です。実績がない団体でも、その思いやプランの切り口しだいで、助成が受けられます。ほくはここがすごく大事だとおもっていますが、今年は既存の組織の新規事業が多かったようですね（ちょっと残念です）。

印象的だったのは、さまざまな現場を抱えた方の熱心なプランと出会ったことです。特に、特定地域の課題を抱えている、危機感の高いもの。また、対象としている顧客が明確で、さらに問題解決の手法が具体的で革新的なもの。そういう切迫感の高いプランは、絶対に落としてはいけない！と感じました。素敵でした。

一方で、実際には一生懸命に活動されていると思うのですが、文面からは、問題発見もあいまいで、切迫感も、具体的な行動計画も見えてこないプランも多々ありました。やはり、こ

ういう非営利の活動は、社会や周りのひとに「伝えていく」という部分が、ものすごく大事だとも思います。その点で、もったいない！とおもうプランがいくつもありました。

全体としては、こうしてたくさん活動をしているグループが集まると、それぞれ違う「窓」から社会にアプローチしていますが、そこから見える社会の姿には、本質的に同じ課題や問題点があり、同時に良さもあるんだなあ、とつくづく思いました。これがコムケア活動の、「大きな福祉」につながっているんですね。

以下は、「もったいない！」と思ったプランに共通していたことをいくつかあげてみます（ちょっと偉そうですが、）。

2) 問題発見について： ～なぜ、これが問題なのか？

基本的にこうした活動は、問題解決型のはずです。

どんな問題を、地域や社会に生きる個人として発見して、それがどんなに必要なことなのかを、手短かに伝えるのが今回求められたことだったと思います。

福祉系に多かったのですが、なぜ、それが問題なのかにきちんと触れず、分野外の人には分かりにくいものが多かったように思います。

今回の短いスペースで伝えるのは大変なことですが、逆にこれができれば活動の展開が変わるはず。現場も物凄く大事ですが、現場のためにも、言語化の努力も大事なのではと思いました。

3) 共感性について： ～「私」の視点を「我々」に

ほぼ同じことですが、読み手の立場にもっと立ってほしいプランがいくつもありました（最終のプレゼンはどれも素晴らしいかったです）。

「私」の視点をより多くの「我々」の視点にまで広げる伝え方、共感性を意識して欲しい。逆に、よいプランは、読んでこちらが意義を感じてしまって、巻き込まれそうでした！手伝いたくなってしまう。

4) WHY ME? WHY YOU? ～お見合いです

少し驚いたのは、「なぜコムケアなのか」について語ったプランがあまり多くなかったことです。コムケア側もなるべく趣旨や思いに沿った、共感する団体に出したいはず。これはお見合いです。

「なぜ、自分たちを支援すべきか」に加え、「なぜ、コムケアから欲しいのか」を明確に示している団体はやはり、1次の審査を通りやすかったように思います。

5) 投資の視点 ～活動はミッションを本当に達成するのか？

最後に、これも助成をする側（最終審査のお客さんも含みます）からすれば、社会に対する投資です。限られたお金をどう配分して、よりより効果を生み出すか、みんなで考えます。

ただお金が欲しい、というトーンしか見えないプランはやはり通りにくいと思います。特に、コムケアの助成は、一年だけのもの。この助成をテイクオフ（離陸）のきっかけにして、

持続可能な活動へ発展させていくビジョンや戦略が見えれば圧倒的に有利です。ただ「欲しい」というだけでなく、具体的なプロセスや成果を見せる工夫があればと思いました。

・・・これを永久に続けるのか？それとも、まずはこれから始めて、1年後、3年後にはどういう展開をして、そもそものミッションを達成するのか？使い切ってしまうだけではない、証拠を出来る限りみせてほしい。

そういう意味で、活動のコンテンツ（内容）を語っていても、コンテキスト（物語）を見せてくれているプランは多くなかったように感じました。

お金を出そうとする人、一緒に汗を流してくれようとする人。

こういうステークホルダーも大事な顧客ですから、やはりコミュニケーションは、「大きな福祉」を前提にした非営利活動には、どうしても欠かせない能力なんですね。今回の審査を通じて、強く実感したことです。最後に、最終プレゼンは、本当にみなさん素敵でした。どうもありがとうございました。

■橋本典之さん（コムケアスタッフ）

私にとってコムケアにスタッフとして関わらせてもらって初めての資金助成プログラムでした。そして無謀にも163の全プロジェクトを読ませて頂くことになりました。今思えば、昨年の最終選考会では参加者として29団体のうち、5つを選ぶことでさえ、頭を抱えていた自分がいたのを忘れていました。

枚数でいえば、団体概要とプロジェクト計画書の2枚だけなのですが、そこから伝わる思いというのはそれ以上の重みがあります。そのため何度も何度も読み返す必要がありました。評価基準を基に評価をしていきましたが、読むにつれて迷ってしまいます。プロジェクト同士を比較すると基準さえ揺らぎました。

そこで、私は1日に見るプロジェクトの数を減らし、一つ一つ時間をかけて読むことにし、できるだけ2枚の申請書以外の資料（HPなど）にも目を通すようにしました。それでも読み返したら評価は変わっているかもしれません。大変、難しく、終わった時はどっと力が抜けました。

プロジェクトは、コムケアの特徴である「大きな福祉」を表すように様々なジャンルのものが集まりました。私は、介護の分野に興味があるので、そちらについて目がいてしまうのですが、芸術・文化、環境などのプロジェクトを見ることで視野も広がりますし、「なるほどなあ～」と評価を忘れて読んでいたことも多々ありました。そういう意味でとても勉強になりました。

ただ評価をする際、気になったのは、プロジェクトの内容の中で単発型のイベントが多かったことです。私は、素晴らしい活動は継続してやるからこそ意味があると思うので、今回助成を受けたとしても、来年はお金がないから出来ないでは

支援にならないと思いました。もちろん多くの団体が継続を前提に考えていると思いますが、それが書いていないことが多く、伝わってきませんでした。

コムケアは、助成するだけでなくその後の関係やネットワークをつくることを大切にしている団体なので、そこを踏まえたプロジェクトがもっと出てきて欲しかったです。そして、それは実は、助成を受けた、受けないに関わらずできることです。コムケアは助成先団体とのみネットワークをつくっているわけではないので、積極的に参加して頂けるといいと思います。私もその一人です。ネットワークの必要性を感じているが、忙しすぎて余裕がないという団体が多いと思いますが、一度でもそれに触れてみると、その虜になると思います。そこが、ただの助成プログラムではない『コムケア活動支援プログラム』です。最終選考会に参加して頂いた方は、それを感じて頂けたのではないのでしょうか。

最後に、申請をして頂いた163団体に感謝します。評価することは大変でしたが、その後も申請書を読みながらパワーをもらっています。ありがとうございました。

7. この3年間の振り返りとこれからの展望

当初からの予定通り、この活動は3年をもって第1期を終了する。これまでの3回の活動を振り返り、これからの展望の方向性を整理しておく。

(1) 3年間のまとめ

3回にわたる資金助成プログラムの実施を通して、単なる資金助成プロジェクトとは違った、支えあいの関係づくりの理念が少しずつ理解され、全国にコムケアのネットワークを広げだすことができた。また、資金助成プログラムの分野にも、ささやかながら新しい風を吹き込むことが出来たと思う。

その成果を改めて整理しておく。

■透明性の高い資金助成プログラムの実現(選考過程を公開)

目線の高い選考方法ではなく、応募団体も参加できる選考方法を実現し、最終選考会は完全な公開型を定着させた。選考過程はすべて公開。また応募団体すべてに対して、個々にコメントやアドバイスをするスタイルを実現した。

■新しいNPO支援の動きへのささやかな影響

公開型・参画型の選考方法、助成金の用途の柔軟性、資金だけではなく汗でも支援する体制、応募団体との協働作業、など、これまでのNPO支援プログラムの問題点を一つずつ解決する方向で新しい試みを重ねてきたが、そうした動きをフォローする動きが出てきている。

■大きな福祉概念の広がり

個々の問題への対応を超えた、大きな福祉への理解を深め、それを背景にともすればタコソバに陥りやすいNPOのネットワーク志向を高めてきた。また、福祉の「暗い面」だけではなく、「明るい面」への関心を高め、福祉関係者の意識を変える働きかけも少しずつ成果を上げはじめている。

■新しいNPOフォーラムのモデル提案

○バザール型NPOフォーラムの開催(2003年)

全国20のNPOの参加を得て、実践的な交流を深める、新しいスタイルの公開フォーラムを開催。CATVで放映。このスタイルのフォーラムが少しずつ広がりだしている。

○共創型NPOフォーラムの開催(2004年)

企画段階からNPOを中心とした、開かれた(誰でも参加できる)実行委員会を組織し、そこに企画運営を一任するとともに、単なる話し合いのフォーラムではなく、そこから必ず具体的な実行計画が生まれ、新しい物語が始まることを目指したフォーラムを実施。すでにいくつかの動きが出始めている。

■NPO活動とソーシャルアントレプレナーの接点づくり

コムケアのサポーターの中には、経営コンサルタントや税理士もいるので、そうしたメンバーの協力も得ながら、事業型NPOを育てる仕組みづくりに着手。

(2) 支援先の新しい物語づくりの一例

支援団体の中には、支援プロジェクト(新しいプロジェクト)を、その後、大きく発展させたところも多い。もちろんコムケアの支援だけが理由ではないが、そうした展開にささやかな役立ちをしたことは間違いない。以下にいくつかの事例を示すが、これ以外にも発展が期待できるものは少なくない。

○全国マイケアプラン・ネットワーク

当事者がケアプラン作成者になる運動として、全国に広がりだしている。ノウハウを集めたプログラムソフトも開発して公開している。

○コミュニティアート・ふなばし

支援プロジェクトを一つの契機として、千葉県のNPOコンソーシアムへの展開にまで発展。

○浅間温泉ケアタウン化構想

松本市のライフデザインセンターが取り組んだ構想づくりのプロジェクトは、その後、行政からの支援を受けて、実現した。かつての温泉旅館は宅老所に生まれ変わり、浅間温泉全体の活性化にも大きな影響を与えだしている。

○ホスピタル・アート活動

病院に関わるコムケア仲間が集まって、病院をもっと元気が出る場所にしようという活動がスタート。病院の協力も得て、テレビでも取り上げられてきた。

○障害者施設による中古PC再生事業の広がり

支援プロジェクトから、同じコムケア仲間の障害者施設での事業展開が検討されだしている。コムケア仲間に対する再生PCの無償提供もしてもらっている。

○宅老所のコミュニティビジネスへの取り組み

高知県のある宅老所では、支援プロジェクトで高齢者が伝統料理を復活させた昔祭りを実施したが、それを契機に、さまざまな活動が始まり、今では伝統料理をコミュニティビジネスとして展開できないかが議論されるほどになっている。

(3) コムケア理念の評価

コムケア理念の「大きな福祉」と「公開重視」に関しては、この3年間で共感者が広がっていると思う。

第1回目のプログラム展開の際には、「大きな福祉ではテーマがあいまいでメッセージ性がないし、選考しにくい」「NPO支援の場合は、もっとテーマを絞るべきだ」「大きな福祉よりも、小さな福祉が大切ではないか」などという異論も少なかつたが、次第に大きな福祉の意味が伝わったせいか、むしろ最近では「大きな福祉」の重要性や有効性に共感してくれ

る人が増えてきており、申請プロジェクトにも、そうした動きは少しずつ出てきている。フォーラムなどでも、大きな福祉の視点が強まっているように思われる。

「公開重視」に関しても、1回目には「公開」を前提にした募集であったにも関わらず、自らの情報を出すことに対しては否定的な支援先もあったが、次第にネットワーク志向が高まり、自らのノウハウを公開することで、その社会的価値を活かし、さらには外部からの協力を呼びこむことで自らのノウハウを進化させる姿勢が強まっている。

こうしたことから、コムケア理念は多くのコミュニティケア活動に受け入れられる方向にあると思われる。

(4) これからの展望

これまでの3年間の活動で、NPO支援の「新しい仕組み」の開発とそのシステムの基礎づくりを行うことができた。これを踏まえて、これからはこのシステムを定着させ、充実させていくとともに、仕組みそのものの自立化に取り組んでいく必要がある。

そして、将来的には、全国に広がりを持ったコムケのネットワークを活かした、新しい「結い」を実現し、それを運営して行くための事務局となるコムケアセンターを事業型NPOとして育てていく計画である。

新しい「結い」(支え合いのコミュニティ)の構築が最終的な目標である。

新しい結いの構築



第2部

資金助成プロジェクト活動報告

1. 活動支援プロジェクト

1. 障害者の経済的自立を支援する共同作業所の設立……………22
2. 宅老所発！ 地域の多世代交流拠点づくり事業……………23
3. 障害者雇用の場としての「まちかど図書館」事業……………24
4. みんなでつくろう佐倉ミュージカル・パフォーマンス……………25
5. 「日本での生活ガイドブック」発行事業……………26
6. 路上生活者の自立をめざす寄せ場型地域居住支援……………27
7. ろう児とその家族を支援するためのビデオの作成事業……………28
8. ユニバーサルデザインに配慮した補助犬の服づくり……………29
9. 福祉・農業の融合した拠点（コムケアの里）づくり……………30
10. 個性的な手織り製品づくりとファッションショー……………31
11. 入所施設から地域生活への移行プロジェクト……………32
12. いのちをささえあうコミュニティづくり……………33
13. 「あい・あい・キッズ・パーク」事業……………34
14. ホスピタルアート・プロジェクト……………35

*支援プロジェクト「インフォームド・コンセント事業」は、諸般の事情で実施を延期しました。

2. 活動費一部支援プロジェクト

1. 地域情報探索システムの構築……………36
2. 「発達障害児に公共遊園施設を経験させたい」プロジェクト
3. 環境・助け合い・健康グループによる町づくりプロジェクト
4. 畑のフリースクール……………37
5. 救急救命活動シンポジウムと講習会の開催
6. 「市民がつくる地域福祉計画」学習会モデル開発
7. 「メロウ伝承館」の構築……………38
8. ピポ・ユニバーサルミニ駅伝
9. 癒し系テディベアコンテスト
10. 「フリーリバースクール」プログラムづくり……………39
11. 市民の目で評価調査した高齢者施設の情報公開
12. 「私と町の物語」
13. まちだ Nature & Human Project……………40
14. RGEER ネイチャーリーダー養成講座
15. アートインストラクター人材バンク立ち上げと縁結び事業

3. 支援イベント

1. みんなで暖まろうよ！『冬籠り祭』……………41
2. ちばNPOユースフォーラム
3. 「ひだまり」交流会……………42
4. こども達と社会を結ぶために～いろいろな人達どうしの協力を考える
5. 太陽とかぜの学校 グリーンエネルギーで地球を元気にしよう……………43

■障害者の経済的自立を支援する共同作業所の設立 NPO法人 もやいの会

団体名	NPO法人もやいの会
代表	五十嵐謙二
設立	2002年1月19日
目的	障害があり支援を必要としている者に対して、自立して生活することに必要な訓練をすると同時に、障害者が慣れ親しんだ地域で、経済的にも自立して生活できるように支援すること。
所在	東京都町田市



○プロジェクトの目的と概要

もやいの会は、障害者の経済的な自立を支援する目的で、2002年1月に設立された。代表である五十嵐謙二さんの二男は自閉症のため、自然染め・織の作業所に通っていた。しかし、その作業所の運営は、障害者の経済的な自立を支援するという考えはなく、改善も見込めない状況だった。それならば、障害者の経済的自立を支援する作業所を自分でつくろうと考えて、始めたのがもやいの会である。

町田市からは、「障害者計画に基づき、作業所の数は足りている、新規の作業所は作らない」と言われたが、成人障害者・保護者が求めている作業所はないことから、市の協力は得られなくても作業所の設立を決意したという。

今回のプロジェクトは、障害者の経済的自立を支援する共同作業所の設立である。

○活動内容と成果

作業所設立のためには、事業を決めなければならない。障害者が製造する製品であっても市場競争力が持てるもの、しかも安定的な市場という視点から、毎日消費する食料品に的を絞った。

たまたま、宮城県でおいしい豆腐をつくっている作業所があると聞いて、早速、訪問した。そこで、はらから福祉会蔵王すずしろ作業所の武田元施設長と出会い、意気投合し、豆腐事業を始めることを決意した。豆腐産業は価格重視と品質重視に二極化していること、後者の場合、地場産業が主体であり、素人が参入しても勝算があることから、国産大豆と自然のにがりこだわった豆腐づくりを事業とすることにした。

2003年8月にNPO法人格を取得。10月に町田市に「まめ道場 鶴間」を開設した。大勢の協力者に恵まれたおかげで、計画通りに開設にこぎつけることができた。開業資金は自己調達と融資でまかない、技術面は蔵王すずしろで研修させてもらい修得することができた。

現在、女性職員1人と利用者（作業所で働く障害者）1人が働いている。五十嵐さんも、今春、会社を定年退職し、4月からは専従で働いている。

商品は、国産の大豆と自然のにがりを使った、一丁200円の豆腐が中心で、それに厚揚げ、豆乳、おからを販売している。開設前から、蔵王すずしろの豆腐を販売していたので、地域のなかで

の顧客づくりは順調に進んでいる。店の立地はあまりよくないが、車や宅急便による配達など、さまざまな工夫でカバーしている。そのおかげで、営業も順調に拡大し、もう一息で黒字化を達成できる勢いである。

利用者は、早朝から夕方までハードな仕事であるにもかかわらず、喜んで豆腐づくりに取り組んでいる。利用者には仕事の喜びを知ってもらいたいと思っているので、経営の目標も質量ともに高いところに設定している。

○これからの展開

豆腐づくりは、大豆や水温や気温や湿度に左右され、毎日同じように作っても同じものが出来ない。安定した高品質の豆腐づくりを実現することが当面の課題である。そして、新しい顧客を開拓し、収益の拡大を図りたいと考えている。利用者が自活できるように給与をしっかりと払っていくためには、利益の拡大が必要である。

知的障害者が働く授産施設や小規模作業所では、障害者一人について、毎月10万円以上の補助金を得ているが、利用者の給与は月額1万円にも満たない場合が多い。知的障害者福祉法に定める「職業を与えて自活させる」という目的には程遠いのが実態である。「まめ道場 鶴間」では現在、利用者の給与は18歳で入所した時点で3万5000円、10年後の28歳で7万円と決めている。収益がよくなれば、この水準ももっと高くしていけるはずだし、利用者も増やしていける。

五十嵐さんの次の目標は利用者たちのグループホームだ。3年後の建設を目指している。利用者の住・職を確保することにより、初めて地域で自立して生活する条件が整う。一般の社会で「当たり前」のことは障害者にとっても「当たり前」でなくてはならない。

現存の多くの施設は、利用者の保護者が死亡した場合、利用者の生活に対してどのように責任を果たそうとしているのか。もやいの会はここにも一石を投じたいと考えている。

「まめ道場 鶴間」が投ずる一石に注目していきたい。

■宅老所発!地域の多世代交流拠点づくり事業

～気になる場所・行きたくなる場所・ワクワクする場所づくり～

NPO法人 生活支援舎

団体名 NPO法人 生活支援舎
代表 山岸暢男
設立 2000年4月16日
目的 高齢者及びその家族が、地域の人々と助け合いながら、住み慣れた場所で安心かつ充実した生活を続けられるように、住民参加で生活支援のための様々な事業を行い、地域社会に寄与することを目的とする。
所在 長野県豊科町



○プロジェクトの目的と概要

生活支援舎は、地域で培われてきた人のつながりを大切にしていって、お年寄りを生活者という視点でとらえ支援していくことを目指して設立された団体である。

宅老所に着目し、ビデオ上映会などを行い、住民と一緒に開所したのが、長野県の介護保険指定事業者(通所介護)第1号「宅老所いいせ」である。2000年7月にスタートし、着実に成果をあげている。「いいせ」とは方言で「いいよ」という受容の意味だ。

今回の多世代交流拠点づくりプロジェクトは、「宅老所いいせ」のスタッフが、近くに空いている土地と民家があると聞いて、もう一つ宅老所をつくりたいという思いを持ったことからスタートした。

地域の人たちの協力により、草木に囲まれ家が見えない状態だった民家は、昔ながらの構造を残しつつ改築された。そして、2003年12月、「宅老所いいせ新宅」が誕生した。敷地面積は600坪。広い庭や畑をもった宅老所である。

この宅老所を拠点にして、地域住民やボランティアグループ、学生などが日常的に出入りできるような、自然な形の多世代交流の場をつくりたい。特別なイベントがなくても、ここにいれば、高齢者との交流、畑の農作業、調理などに自然に参加でき、そこからまた世代を超えた新しいつながりが育っていくようなコミュニティができればいい。それが、今回のプロジェクトである。

○活動内容と成果

生活支援舎の姿勢は、いつも住民と一緒に取り組むことだ。今回も、計画段階から地域の人たちの参加を募り、進めてきた。そして、みんなの協力で、通所介護施設(宅老所)と誰でも利用できるフリースペースがつけられた。家具や備品なども、ほとんどが住民たちから寄付されたものであり、地域の人と一緒につくったことが実感できる親しみやすい場である。

宅老所も、できるだけ自然な生活スタイルを大切に、馴染みの顔ぶれと一緒に、できることややりたいことをしながら、ゆっくりと過ごすことを大事にしている。広い庭もあるので、散歩に出ることもできるし、地域の人との交流もできる。介護を意識させない、家庭的で安心感のある生活支援に努めている。

隣接するフリースペースは、地域の人が気楽に出入りでき、宅老所のお年寄りとの交流も含め、多世代交流の場にしていく方針だ。そのため、ボランティアの人たちと話し合っ、ルールを作成した。ルールといっても、「掃除は利用した人が行う」「利用時間は9時から16時まで」「利用には一人一回100円負担」というような簡単なものである。個人同士の交流を大切にしたいので、団体への貸切はしないことにした。

できるだけ多くの人に馴染んでもらうために、毎月5のつく日には、「よしましよの会」を開いている。郷土料理を持ち寄り、お喋りをしたり手芸をしたりという、気楽な交流の場である。年齢も職業も制限は全くなく、来た人は誰でも歓迎される。始めて間もないが、大勢の地域の人が集まり、賑やかな空間となっている。

企画の段階から地域の人と一緒に取り組んできたからこそ、短期間の内に多くの人で賑わう「よしましよの会」が生まれ、地域につながった宅老所になったのだろう。

○これからの展開

宅老所いいせ新宅は開所してから半年も経っておらず、広い庭に花を植えたり、畑で野菜を育てたりと宅老所の活動は始まったばかり。しかし、作物が育ったら、その日の畑の収穫物で郷土料理づくりを教えあおうなどという夢はどんどん広がっている。

現在、関わりが少ない子どもたちにも、この宅老所が気軽に立ち寄れる場となるような仕組みづくりも必要かもしれない。子どもたちが集まってきたら、もっとにぎやかな楽しい場になるだろう。

現在、通所介護のみだが、宿泊のニーズがあれば短期宿泊なども考えているという。被介護者としてではなく生活者という視点でとらえ支援していこうとする生活支援舎の思いが感じられる。こうした取り組みを通して、小規模ケアに求められる役割についても考えていきたいと考えている。

約600坪の土地という資源と地域の人とのつながりという大きな資源を活かして、いいせ新宅がどう発展していくか楽しみである。

■障害者雇用の場としての「まちかど図書館」事業 NPO地域づくり工房

団体名 NPO地域づくり工房
代表 傘木宏夫
設立 2002年10月1日
目的 地域の自然や文化、人材を活かした持続可能な地域社会の実現に向けて、「環境・福祉・学びあいの仕事おこし」「市民が主役の地域づくり」をすすめることを目的とする。
所在 長野県大町市

○プロジェクトの目的と概要

どこの地域にもたくさんの潜在的な資源がある。地域づくり工房代表の傘木さんは、そうした資源を活かして、地域社会が抱える課題に 대응していくためのコミュニティビジネス起こしに取り組んでいる。そうした活動の積み重ねで、地域社会の経済の仕組みは持続可能なものになっていく。それこそが傘木さんの考える「地域づくり」である。

「環境・福祉・学びあいの仕事おこし」「市民が主役の地域づくり」が、地域づくり工房のスローガンだ。その実現に向けて、これまでに、2つのエコプロジェクトに取り組んできた。

ひとつは、大町市の恵まれた水資源を活かして、水車や小規模水力発電による自然エネルギーの開発・普及を行う『くるくるエコプロジェクト』。もうひとつは、市内の休耕田を活用し菜の花を楽しみながら菜種から軽油（バイオディーゼル）をつくっていく『菜の花エコプロジェクト』。いずれも地域にある資源を活かしたものである。

今回注目したのは空き店舗。全国の商店街がそうであるように、大町の商店街にも空き店舗が増えてきている。そこを活用して、仕事起こしをしながら、商店街を活性化できないかというテーマである。幸い、空き店舗も提供してもらえるようになった。しかし、地域づくり工房が取り組むからには、そこに環境や福祉、さらには学びあいの要素も入れ込みたい。

そうして構想されたのが、「まちかど図書館」事業である。家庭に眠っている古本を集めて、商店街の一角に、みんなが気楽に利用できる図書館をつくらうという計画だ。運営は、近くの障害者作業所「ひまわりの家」に協力をお願いし、障害者の就労の場にしていく。古本の有効活用や廃棄物削減も期待できる。そして、なによりも、最近元気がなくなってきた商店街の中に、だれもが気楽に立ち寄れる交流と憩いの場が生まれる。まさに地域づくり工房のスローガンにぴったりのプロジェクトだ。

○活動内容と成果

しっかりした計画と実現のためのネットワーク。プロジェクトは順調に始まった。フリーマーケットやチャレンジショップ（市及び商工会議所による支援事業）の利用者などにアンケート調査も実施し、組織づくりも進んだ。ところが、いよいよ本格的に動き出そうとした時に、予想もしていなかった事件が起こった。



活動を予定した空き店舗家主が急逝し、その場所が競売されることになったのである。店舗を借りる話は白紙に戻り、計画の根底が覆ってしまったのだ。一時は計画の断念も考えたが、プロジェクトへの共感者も多く、地元商店街からも応援の声が寄せられてきた。これまで地域に根ざした活動をしっかりと展開してきたことのおかげである。

商店街振興組合との話し合いを進めた結果、計画を少し変えて再出発することになった。空き店舗も借りられるようになった。そこを工房機能のあるチャレンジショップにし、市内のヘンリーミラー美術館と連携して、クラフト作家による「まちかど美術館」を開設、その中に美術関係図書中心に「まちかど図書館」を立ち上げる。それらの店番として障害者の雇用を図る。さらに、商店街が検討している地域通貨事業の実証実験を、そこで行っていく。これが新しい計画である。

プロジェクトの実現は遅れたが、内容的にはむしろ進化したといてもいい。

○これからの展開

まずは立ち上げ事業として、「菜の花エコプロジェクト展」を開催することになっている。そして、7月には「まちかど美術館」と「まちかど図書館」が開設される。そのオープニングイベントも計画されている。

10月には、大町市制50周年事業として、さまざまなイベントが予定されているが、「まちかど図書館」事業もその一画として役割を担うことができそうだ。

今回のプロジェクトは、思わぬことで出足は遅れたが、その分、学ぶことも多かったに違いない。商店街との関係も深まったし、様々な活動のつながりも広がりがだしている。

環境と福祉と文化を組み合わせた、このプロジェクトは、大町にかぎらず、どこの商店街にとっても活用できるプロジェクトである。地域づくり工房が創出した大町モデルの「まちかど図書館」が全国に広がっていくことを期待したい。

■みんなでつくろう 佐倉ミュージカル・パフォーマンス NPO法人 佐倉こどもステーション

団体名 NPO法人佐倉こどもステーション
代表 守田泰子
設立 1984年5月11日
目的 子どもの権利条約をもとに、子どもが社会のなかで主体的に生きる人になるための機会や環境を子どもと共に創る。
所在 千葉県佐倉市
ホームページ <http://www.jade.dti.ne.jp/%7Egekijo/>

○プロジェクトの目的と概要

佐倉こどもステーションは、1984年に佐倉おやこ劇場として設立され、定期的な舞台芸術鑑賞や異年齢集団でのあそびなどの機会をつくりだしてきた。2001年11月に、いろいろな人が行き交うステーション(駅)になりたいという願いを込めて、団体名を変更すると同時に、NPO法人格を取得した。

今回のプロジェクト、「みんなでつくろう 佐倉ミュージカル・パフォーマンス」の発端は「どんぐりと山猫」というミュージカルだった。この舞台に佐倉市の子どもたち30人が参加したのだが、舞台での子どもたちの瞳の輝きと歌声に、観ている大人も子どもも心が沸き立ち、会場全体が大きな喜びにつつまれたのだ。市民が参加するミュージカルには特別な力がある。この感動を佐倉のみんなに体験してもらいたい、共に感じあいたい、みんなでつくるミュージカルへの取り組みが始まった。

目指す目的は大きい。住民、企業、行政、NPOみんなで、市民ミュージカルを創造することを通して、人々のつながりのある生き生きとした、住みやすいまちを育てることである。市民参加のミュージカルには、それだけのパワーがあると、提案者の1人である大場博子さんは考えたのである。

○活動内容と成果

2002年12月に「みんなのミュージカルをつくろう会」が発足した。そして、脚本も音楽も振り付けもすべて市民がつくり出すミュージカル・パフォーマンスが始まった。

まず手がけたのが、市の広報を通じての「あなたの伝えたいことは何ですか」の公募。500の思いが集まった。それらをつなげて、脚本をつくろうと考えていたのだが、なかなかうまくつながらない。みんな、ミュージカルづくりは初めてのことであり、思いはあってもノウハウが不足していた。一時は方向が見えなくなつて、せっかく集まってくれた人たちにも不安が高まった。

こうした状況を打破してくれたのは、2003年10月の「佐倉まちづくりフェスタ」への参加だった。佐倉城址公園で「ミュージカルをつくりたい!」というミニミニミュージカルを公演したのだが、その実践を通して、再び「どんぐりと山猫」の体験が蘇ってきたのである。「舞台に立つと誰でも輝くことができる、気づかなかった自分に逢える、感動を体験し、共有し、与えることができる」とは、その時、振り付けを担当してくれた専門家のことば。みんな



に元気が戻ってきた。

原点にもどって、子どもたちの内にあることばや音楽や夢や疑問などを丁寧に紡ぎだして、ミュージカルという手法で表現しよう。そう考えて、公募で集めた500のミュージカルの種を題材に、小学生たちに呼びかけて、ワークショップを行うことになった。

市内の小学校にちらしを配り、ミュージカルの出演者を公募したところ、50数名の小学生が集まった。中高生や大人を合わせると出演者は70人。そのメンバーで、毎週、ワークショップをしながら、脚本をつくっていった。テーマは「あそび」。主役は決めずに、だれもが最低1回は出演することもみんなで決めた。

そして、3月20日。佐倉市民音楽ホールでプレ公演「あそびって、なに?」を開催した。600人以上の観客を集めることができ、プレ公演としては大成功だった。演出、脚本、大道具、衣装、音響、照明など、みんなで協力しながら、1つのミュージカルを完成することができたことは大きな自信になった。

○これからの展開

8月28日に、佐倉城址公園で、本公演を開催する計画である。本公演は、プレ公演の「あそびって、なに?」を受けて、その回答を出したいと考えている。あそびを考えることを通して、生き方や地域社会のあり方が見えてくる。

このような大掛かりなミュージカル公演を毎年やることはできないが、ミニミュージカルは、これからも継続させたいと、佐倉こどもステーションは考えている。

いまの子どもは、ありのまま自分を表現することが不得手である。ミュージカルへの参加によって、自己表現の楽しさを味わってほしい。また、ミュージカル活動を通して、大人と子ども、子ども同士の交流が活発になり、住みよい地域社会が育ってほしいという、大場さんたちの活動は、いつか佐倉市全体を、大きな舞台にしていくに違いない。

■外国籍家庭の子どもたちに向けた「日本での生活ガイドブック」発行事業 Asian People's Friendship Society (APFS)

団体名 Asian People's Friendship Society(APFS)
代表 吉成勝男
設立 1987年12月20日
目的 1980年代以降、日本にやってきた新来外国人（ニューカマー）とよばれる人びととの相互扶助の理念にもとづく、多文化共生社会に実現を追求する。
所在 東京都板橋区
ホームページ <http://www.jca.apc.org/apfs/>



○プロジェクトの目的と概要

Asian People's Friendship Society(APFS)は、1987年12月に設立された。代表の吉成勝男さんが企業内の労働組合に勤務していたとき、たまたま知り合ったバングラディッシュ人から労働問題や生活面での相談を受けたのだが、そのことがきっかけで、多くの外国人が相談に訪れるようになった。これが発端である。当時はバブル経済の始まるころで、外国人労働者がたくさん日本にやってきたが、日本語をあまり話せないことから、会社や地域社会でトラブルを起こすことが多かったのである。

現在も、ニューカマーとよばれる新来外国人の相談業務が活動の中心になっている。相談する外国人には会員になってもらっており、その会費収入が活動資金の柱のひとつになっている。

今回のプロジェクトは、外国籍家庭の子どもたちに向けた「日本での生活ガイドブック」発行事業である。日本で暮らす外国籍家庭の子どもの中には、言葉の問題などで日本での生活ルールが分からないことが多い。そうした子どもたちが安心して生活できるように、子ども向けの生活ガイドブックを制作することが当初の目標だった。

○活動内容と成果

しかし、作業を進めるうちに、その目標を達成するためには、親にまず理解してもらう日本での制度がたくさんあることがわかってきた。そこで、むしろ親に向けてのガイドブック制作に変更した。内容は、「妊娠・出産」「乳幼児の健康診断・医療補助」「子どもの保育園から大学までの教育」の3つである。

まず取り組んだのが、日本語版づくりである。プロジェクトを担当するメンバーで内容を検討し、それに基づいて、区役所などへの聞き取り調査や各区で作成している外国人のためのガイドブックの収集などを行った。

その結果、自治体によってサービスが大きく違うことがわかってきた。たとえば、労働ビザが切れたオーバーステイの外国人(22万人いるといわれる)の家庭の子どもは、義務教育を受ける権利はあるが、保育園には入れないと考えられていた。しかし、自治体によっては、入園できるケースもあることがわかった。ガイドブックでは、そうした自治体による違いがあることも明記するようになった。

日本語版は完成したが、それをそれぞれの母国語に翻訳する

必要がある。今回は APFS の会員を想定して、英語、タガログ語、ベンガル語、ビルマ語の4か国語に翻訳することにした。翻訳は仲間や会員が行ったが、意外なところで壁にぶつかった。ベンガル語とビルマ語は、その言語を使って、パソコンに入力する方法が見つからなかったのである。結局、グローバルライターというソフトを使うことで対応できることになったが、その関係で完成が遅れてしまった。

5月末までには完成する予定だが、完成したら、会員に配布するとともに、商店街で配布したり、区役所の国際交流課に置かせてもらったりして、多くの外国人に読んでもらいたいと思っている。

○これからの展開

外国人は、日本語が読めないので、ゴミを分別しないで出したり、借りた部屋で多くの仲間と一緒に住んだりといったトラブルを起こしがちだ。そのため、外国人に部屋を貸さなくなってしまうことも多いのだが、ルールをきちんと説明すれば、そうしたトラブルもなくなっていくはずだ。母国語での生活ガイドブックは大切である。

APFSでは、今後もこの活動は続け、言語も、中国語、韓国語、スペイン語と増やしていくとともに、内容もさらに広げ、子どもが抱える具体的な問題も取り上げたいと考えている。

オーバーステイの外国人家族の支援も大きなテーマになってきている。オーバーステイの外国人家庭の弱みは、将来設計が描けないことである。いつ摘発を受けて、強制送還されるかもしれないからだ。法務省は、いままでの慣例として、日本に10年以上住んで、子どもが中学生以上の家族には、在留特別許可を与える方向になってきている。しかし、子どもが小学生以下の場合には、在留特別許可は与えられない。APFSとしては、そういう家族を支援していきたいと考えている。

労働問題の相談から始まった APFS の活動はどんどん広がってきている。これからはますます大きな役割を果たしていくに違いない。

■路上生活者の自立をめざす寄せ場型地域居住支援

「アフォーダブル・コミュニティ誕生に向けて」の出版活動

路上生活者と共に活動する「山谷」ふるさとまちづくりの会

団体名 路上生活者と共に活動する「山谷」ふるさとまちづくりの会
代表 中島明子
設立 1999年6月19日
目的 路上生活者問題の解決を山谷地域のまちづくり全体のなかで位置づけ、地域住民や各種事業者とのまちづくり合意を促進することで、路上生活者はもとよりこの地域に住み働く人々とともに、居住支援に基づく地域再生の方策を提案し、NPOと協働して事業化する。
所在 東京都台東区
ホームページ <http://www.asahi-net.or.jp/~sm2k-tmr/sanya.htm>



○プロジェクトの目的と概要

「山谷」ふるさとまちづくりの会は、建築やまちづくりの実践家・研究者の専門家集団である。NPO法人自立支援センターふるさとの会と協働しながら、山谷のホームレス問題をまちづくりの視点から解決することを目的としている。

この団体の中島明子代表（和洋女子大学教授）が、自立支援センターふるさとの会から、居住困難層（ホームレス）のための中間居住施設をつくりたいので、建築技術の助言をしてほしいという要請を受けたことが契機になって、1999年6月に設立された。

今回のプロジェクトは、これまでの活動成果を集大成して、居住支援を軸にした路上生活者問題の解決と地域再生の方法論をまとめた、「アフォーダブル・コミュニティ誕生に向けて」の出版活動である。

2002年7月に、「ホームレス自立支援法」が国会で成立し、厚生労働省や東京都のホームレス自立支援への取り組みが新たな段階にきている。そこで、これまでの到達点と解決されていない課題を整理し、さらに新たな段階に向けての提案をしていこうというのが、出版の目的である。

○活動内容と成果

今回の本の核となるのは、2003年10月に、東京で開催されたシンポジウム「NPOによるホームレス自立支援」（自立支援センターふるさとの会主催）での議論である。それに、2001年に、山谷と大阪の釜ヶ崎で開催された「東西寄せ場連続討論会」の参加者からの寄稿論文を加え、1冊の本に編集していくことになった。

これまでの活動の積み重ねのおかげで、東京や大阪からの寄稿論文も順調に集まった。しかし、その編集作業に入りだした時に、この出版事業を根本から揺さぶる動きが起りはじめた。

東京都が、2004年度から2年間、ホームレス地域生活移行支援事業を開始すると発表したのである。民間アパートや都営住宅を年間2000戸借り上げ、それをホームレスに提供しようというプログラムである。東京都は、地域に密着した活動をしている

ホームレス支援のNPOに事業委託をすると発表した。

東京都の事業として、初めてホームレスへの居住施設の提供がはじまったのである。居住困難層（ホームレス）向けの安価な居住施設をどうやってつくるか。これは、「山谷」ふるさとまちづくりの会が当初から掲げているテーマであり、これまでずっと提案し続けてきたことである。それがやっと、行政主導で実現しはじめたのだ。さらに、山谷がある墨田区でも、ホームレス向けのグループホーム支援事業が実施されることになった。せっかく出版するのであれば、こうした動きを無視することはできない。

この事業を活かして、実際に、ホームレスが地域生活に移行できるかどうかを検証し、その成果もぜひとも出版に反映させたいということになった。現在、この新しい課題をどのように論文に織り込むかを議論している最中である。

○これからの展開

東京都のホームレス地域生活移行支援事業には、山谷まちづくりの会としても、民間アパートの借り上げを前提とした、独自の地域居住支援プログラムで参加していく予定だという。これまでの成果を実践に活かせる絶好の機会といっている。

墨田区のグループホーム実施事業に関しても、取り組みを始めている。いままでも、山谷まちづくりの会は、自立支援センターふるさとの会と組んで、一時的な中間居住施設を建設してきたが、この事業を活用して、ホームレスが生涯住めるグループホームをつくっていくこともできるだろう。現在、墨田区と自立支援センターふるさとの会と一緒に、物件を探している最中である。2004年度中には、グループホームを完成したいと考えている。

肝心の本の出版は、少し先延ばしになったが、これまでの成果は、とりあえずホームページ上でPDF出版する計画である。そして、これらの活動成果を反映させた実践編の原稿が完成したら、書籍として出版したいと考えている。

アフォーダブル・コミュニティに向けての、実践的な提案と活動を期待したい。

■ろう児とその家族を支援するためのビデオの作成事業 NPOバイリンガルろう教育センター龍の子学園

団体名 NPOバイリンガルろう教育センター龍の子学園
代表 米内山明宏
設立 1999年4月24日
目的 ろう児に対するバイリンガル（日本手話及び日本語）、並びにバイカルチュラル（ろう文化と聴文化）教育の実践活動として、デフ・スクールの運営を中心とした教育支援や研究活動をおこない、ろう児の健全育成をはかる。
所在 東京都大田区
ホームページ <http://www.tatsunoko.org/>



○プロジェクトの目的と概要

日本のろう学校では、1933年から、70年以上、口話法（現在は補聴器を活用する聴覚口話法）で教えている。これは、聞こえない子ども（ろう児）が話すことを身につけるための方法である。しかし、ろう児は、手話（日本手話）で教育が受けられないために、聞こえる子どもと同等な学力を身につけることは容易ではない。一方、欧米では、約20年前から、バイリンガル・バイカルチュラルろう教育が普及し始めている。手話と書き言葉によるろう教育が、現在では欧米のろう教育の主流になっている。

そこで、1999年4月に、日本でも、バイリンガル・バイカルチュラルろう教育を実践研究するために、バイリンガルろう教育センター龍の子学園が設立された。そして、ろう者である竹内かおりさんが、月1回、公共の場所を借りて、手話や書き言葉によるろう教育のフリースクールを始めた。

現在では、都内の小学校の廃校を借りて、乳児・幼児・小学・中高教室を実施している。さらに、世田谷福祉専門学校の教室を借りてのグループワークや体験学習、生徒に対する個別指導などを行っている。

今回のプロジェクトは、ろう児を持つ親に対して、バイリンガルろう教育の説明や子育てのアドバイスを内容のパンフレットとビデオを作成する事業である。プロジェクトの代表者である玉田雅己さんは、1999年、ろう児である次男を龍の子学園に通わせるようになってから、この団体とかかわるようになった。

○活動内容と成果

パンフレットとビデオの製作は、すべてがメンバーによる手作りである。予想以上に大変な作業であり、不足しているスキルも多かったが、会合やメーリングリストを活用して、みんなで役割分担することで完成させることができた。作業は大変だったが、みんなが意見を出し合ったことで、内容的にはとてもいいものになったし、メンバーが学んだことも多かった。

完成したパンフレットは、3月に開催された第2回バイリンガル・バイカルチュラルろう教育研究大会で、参加者（約520名）に配布した。さらにメンバーが手分けして、病院や療育センター、児童相談所などに置いてもらうようお願いにまわっている。

ビデオも、予定よりは少し遅れたが、メンバーの手づくりで完成

した。編集はもとより、ナレーションや音楽の作曲・演奏まで、すべてメンバーが分担した。そのおかげで、心のこもったものになった。これらを使って、これからバイリンガルろう教育や龍の子学園の活動への理解と関心を高めていく活動を進めていく予定である。

こうした活動と並行して、医師および重度の聴覚障害と診断された子どもをもつ親への相談会も開催した。ろう児の親の当番制による、携帯電話による相談窓口も開設したが、最近、龍の子学園がテレビなどでも取り上げられたため、問い合わせが増えてきている。

○これからの展開

パンフレットとビデオは作成できたが、これでプロジェクトが終わったわけではない。作成したパンフレットとビデオを使って、バイリンガルろう教育への理解を広げ、ろう児やその保護者が安心できる環境を整えていくことが、玉田さんたちの目標である。むしろこれからの正念場かもしれない。

幸いにして、この活動を通して、メンバーの思いは共有化され、活動を進めるツールもできた。龍の子学園の活動の理解者も、少しずつだが増えてきている。6月には、パンフレットとビデオを活用した相談会も開催する予定である。

こうした活動を継続していくためには、組織基盤をもっと安定させていく必要がある。そのため、龍の子学園は、特区の提案書を提出したが、文部科学省から、NPO法人のフリースクールであればいいが、私学助成の対象にはしないという回答があった。しかし、NPO法人のままでは、ろう者である先生に対して、きちんと給料を支払うことが難しい。それでは組織としての自立性は確立しにくい。将来は、何らかの形で文部科学省が認可する学校にしたいと考えている。

問題はたくさんあるが、今回のプロジェクトが玉田さんたちに大きなパワーを与えたのではないだろうか。玉田さんたちの活動がさらに広がっていくことを期待したい。

■ユニバーサルデザインに配慮した補助犬の服づくり

UDくまもと補助犬サポーター

団体名 UDくまもと補助犬サポーター
代表 横尾祐美子
設立 2001年5月1日
目的 UDの概念および考え方を取り入れた環境づくりN o理解と普及および実践。
所在 熊本県熊本市
ホームページ <http://www4.plala.or.jp/Yokky/cafe/undex.htm>



○プロジェクトの目的と概要

2003年10月から身体障害者補助犬法が全面施行された。この法律は、身体障がい者の自立および社会参加の促進を目的としており、これにより、身体障がい者が公共的な施設や公共交通機関などを利用する場合に、補助犬（盲導犬、介助犬、聴導犬）を同伴することができるようになった。

しかし、現実には、犬の毛が落ちるおそれがあるなど、法律ができたからといって問題が解決したわけではない。そうした問題を解決する一つの方法として考えられるのは、補助犬に服を着用させ清潔感及びマナー遵守をアピールすることだ。この問題に取り組んだのが、ユニバーサルデザイン（UD）の普及に取り組んでいた横尾祐美子さんである。

きっかけは盲導犬使用者の会の新年会だった。そこで、盲導犬の服のことが話題になったのだが、デザインや入手方法など不便な点があることを知った横尾さんは、「いいものを探してみましようか」と言ってしまったのだ。それがいつの間にか、服の試作から試着会へと発展した。

取り組んでみると、問題はそう簡単ではないことがわかってきた。同時に、補助犬使用者にとっては大きな価値があることもわかってきた。

補助犬使用者が着せやすく、犬自身も動きやすい、UDの考え方を生かした服づくりに取り組み、それによって補助犬への理解を広げ、補助犬使用者の行動半径を広げて、自立支援の一助にしたいという、プロジェクトのはじまりである。

○活動内容と成果

服づくりのためには、補助犬使用者のニーズや実態を把握することが不可欠である。そこで、まず全国の補助犬使用者や補助犬育成団体に、電話やメールでアンケート調査を行った。回答者数は37人だったが、補助犬使用者の生活や問題点を詳しく知ることができ、デザインの方向性が見えてきた。

服のデザインと製作は、犬の服づくりに実績のある、岐阜のAPARALLELメーカーにお願いした。遠隔地だったために、コンセプトやデザインについてはメールでのやり取りになったが、そこで問題が発生した。相手が専門家だったために、考えが共有されているとばかり思っていたが、専門家であるが故に逆に自分の考えと経験に影響されて、できてきたものはイメージとは別のものだった。

た。改めて、デザインだけではなく、生地の素材や付属品など、詳しい打ち合わせを行い、何回かの試作を経て、TPOに合わせた3種類の服を完成させた。

そして3月14日、試着会を開催した。試着会には、補助犬使用者や服づくりボランティアなど約20人が参加してくれた。補助犬使用者にとっては、普段思っている意見やアイデアを交換できる場にもなり、予定時間を過ぎるほど、試着会は大成功で、地元の新報でも報道された。実際に使用してみると、机上で考えていたのとは違う問題が見えてくる。体験することの大切さを改めて実感させられた。

アンケートなどに協力してくれた県外の関係者からも「実物を見てみたい」「詳しく教えて欲しい」など反響もあった。

出された意見やアイデアは、その後、以前から服づくりをしているボランティアの参考とされ、改善に役立てられた。

○これからの展望

このプロジェクトで完成した3着の試作服は、引き続き、県内の希望者に試着してもらい、興味のある人には型紙を貸し出すことにしている。また、試作に当たって入手できたさまざまな情報は、協力してもらった補助犬使用者などの関係者に報告し、ホームページでも公開していく予定である。

当初はデザイン提案でとどめる予定だったが、試着会后、「販売はしないのか」という問い合わせもきている。コストや販売方法の問題があるため、どうするかまだ決めていないが、今回の活動で大きく広がった関係者とのつながりを活かしながら、犬の服づくりはこれからも継続していくことになるだろう。

たかが「犬の服」と言う人もいるかもしれない。しかし、補助犬の服は補助犬使用者の円滑な社会参加のために必要とされている物であり、ノーマライゼーション社会に向けて、そこに込められた意味はとても大きい。これからの活動の広がりを期待したい。

■福祉・農業を融合した拠点（コムケアの里）づくり 特定非営利活動法人 まちのよそおいネットワーク

団体名 特定非営利活動法人まちのよそおいネットワーク
代表 福田東亜
設立 2000年3月24日
目的 持続可能な地域社会の形成・再生
所在 山口県山口市
ホームページ <http://www.sujet.co.jp/matiyoso>



○プロジェクトの目的と概要

まちのよそおいネットワークは、景観を通じて自分たちのまちをながめてみよう、1992年3月に発足したグループである。これまで、住民による手作り景観賞や近代建築セミナーなど、さまざまな実践をしてきたが、2000年3月、景観をキーワードとする取り組みから様々な分野の市民主体のまちづくりへと活動を拡大させていくため、NPO法人として再出発した。

今回のプロジェクトは「福祉・農業を融合した拠点（コムケアの里）づくり」。山口県日置町に、持続可能な地域社会を実現しようという壮大なプロジェクトだ。もちろん短期間でできる話ではない。構想と実現のためのコアネットワークづくりが目標である。

当初は、福祉コンビニともいわれる「富山型民間デイサービス」的な施設に農業を組み合わせることを目標にしていたが、活動を進めていくうちに、「食」と「環境」も融合させていこうということになった。完成目標は2020年。なんと17年計画である。コムケア支援プロジェクトとしては、異例なプロジェクトとっていい。しかし、まちづくりや大きな福祉は、そのくらいのタイムスパンで考えるべきなのかもしれない。

副理事長の東孝次さんは、コムケア活動の理念に以前から共感し、フォーラムなどにもわざわざ山口県から参加してきてくれた。そのこともあって、「コムケアの里」という名称をつけてくれたのである。

○活動内容と成果

日置町は、昔の農村風景が今に残る地域である。その日置町で、障害者の働く場、赤ちゃんから高齢者まで気軽に憩える所、さらにはボランティアが集える場をつくらうという検討が進んでいることを知った東さんが、循環型地域社会としての構想をふくらませたのが、このプロジェクトの発端である。

最初に取り組んだのが、日置町商工会青年部と協働しての、地域づくりフォーラム in 長門。循環型地域づくりに関心を持つ様々な活動団体の人たちが、このフォーラムに集まり、それを契機に「日置地域づくり検討会」が設置されたのである。

10月に第1回目の検討会が開催され、プロジェクトの大きな方向が確認された。以後、現地調査や先進地調査なども踏まえて、3回の検討会を実施し、日置コムケアの里づくり構想がまとめられた。

いよいよ実行への着手である。構想をまず広く知ってもらい、実現に向けて地元の仲間を増やしていくために、3月に「元気な里づくりワークショップ」を日置町で開催した。初めての外部への呼びかけ活動だったので、果たしてどれだけの参加者があるか心配だったが、高校生から79歳の人まで、幅広い世代の人たちが30人以上も集まってくれた。これは事務局の予想を上回るものだった。東さんは、「地元のパワーの存在を確認でき、プロジェクトの実現が確信できた」という。また、地元の日置農業高校との連携も、これによって実現できることになった。

このワークショップで、構想はほぼまとまってきた。日置町の農村交流センターを活用しての仕出し食事処の建設や無農薬野菜の栽培やニワトリの平飼い、ボランティアセンターや福祉コンビニの開設。さらには体験学習・グリーンツーリズムの実施、自然エネルギーの活用など、計画は盛りだくさんである。大まかなタイムスケジュールも確認できた。

こうした計画は、日置地域づくり拡大検討会を開催し、みんなで確認しながら、実現に向かっていくことになっている。

○これからの展望

日置コムケアの里づくりは動き出した。仲間も少しずつ増えてきた。

しかし、大きなプロジェクトだけに、実現のためには土地や資金も必要である。土地や施設については、休耕田や空き家などの提供をお願いしていく予定だが、問題は資金である。構想づくりは手弁当でもできるが、施設づくりや事業の立ち上げにはそれなりの資金が必要だ。構想を背景に、これからは助成プログラムや行政の補助事業を探していくことになっているが、このプロジェクトを支えてくれる人たちに呼びかけて、「日置コムケアファン」をつくることも、構想には明記されている。

どうやら、このプロジェクトはコムケア活動のひとつのモデルになっていきそうである。これからの展開を注目していきたい。

■ 個性的な手織り製品づくりとファッションショー 福祉作業所どんぐりパン

団体名 どんぐりパン
代表 岩崎孝枝
設立 1996年4月1日
目的 知的障がい者が、仕事を通して、働く姿勢、持続力、集中力を養い、仲間と協力することにより、働く喜びを得る。その経験を力に自立向上を図っていく。
所在 東京都多摩市
ホームページ <http://www.h2.dion.ne.jp/~dopa/#>

○プロジェクトの目的と概要

どんぐりパンは、1996年に設立された知的障がい者の通所授産施設で、現在、17人の知的障がい者が働いている。パンづくり、ケーキづくり、さをり織りが事業の3本の柱になっているが、さをり織りはなかなか事業性が確立できずにいた。

その原因のひとつは、素人のボランティアが製品化していたので、魅力的な製品に仕上げることができなかったことだった。さをり織りは、パンやケーキと違って、ファッション性が求められる。

そこで、近くの服飾専門学校（東京トフィ・ファッション専門学校）の協力を得ることによって、個性的な手織り製品をつくり、ファッションショーを実現するプロジェクトに取り組むことになった。確かな技術と若い感性を持った専門学校生にデザイン・縫製を依頼することで、知的障がい者がつくった個性的なさをり織りの生地を活かすことができると考えたのである。

専門学校生にとっても、知的障がい者との共同作業を通し、体験学習の機会が得られ、社会とのつながりも生まれるため、積極的な協力が得られることになった。

このプロジェクトを通して、さをり織りを第3の収益事業にしていくことはもちろんだが、完成した手織り製品のファッションショーを開催し、地域の人たちにどんぐりパンの活動を紹介し、地域のなかでの助け合い、支え合いの仕組みを育てていくことが、施設長の岩森小百合さんの願いだった。

○活動内容と成果

知的障がい者と専門学校生のコラボレーションは思ったよりも順調に進んだ。専門学校生は、普段の授業が忙しくて、なかなか時間をとりにくかったが、場所が近かったおかげで、3回にわたっての打ち合わせも実現できた。同じ地域で活動している仲間であることが成功のポイントだった。短期間のうちに、知的障がい者と専門学校生の共同作品が、全部で43点も仕上がった。

4月4日（日）、地域の公民館ホールを借りて、ファッションショーを開催した。モデル役も、専門学校生やどんぐりパンの知的障がい者が演じたが、専門学校生の友人や地元の大学生、地域の障がい者団体職員なども協力してくれ、総勢27人のモデルが誕生した。しかも、元モデルやファッションショー経験者も参加してくれたため、初めての試みにもかかわらず、ファッション



ショーは大成功だった。

できるだけ多くの人たちに参加してほしいという思いから、1000部のちらしを制作して、広報に力をいれたおかげで、当日は会場の140席がすべて埋まるほどの大盛況だった。地元住民をはじめ、障がい者団体の人、多摩市長、多摩市議会議員、地元の国会議員など、さまざまな人が見に来てくれた。

参加者から、「障がい者ががんばっている姿を見て、癒された」「明るく和やかな気持ちになった」など、うれしい感想がたくさん寄せられた。また、「さをり織りは若者が着ても似合うことがわかった」という声もあり、これからのさをり織り製品の広がりも実感できたのも収穫だった。

○これからの展開

今回の成功を踏まえて、障がい者と若者の長期的なコラボレーションの場をさらに広げていきたいと岩森さんは考えている。支えあうことの大切さも実感できた。今春、専門学校を卒業した2人からも、引き続き協力していきたいといううれしい申し入れもあった。今年12月には、さをり織りの展示即売会を開催することも決まっている。

今回のプロジェクトだけでは、さをり織りの事業性確立にまでは至らなかったが、どうすれば確立できるかの道筋が見えてきた。今後、定期的に、さをり織り講師や服飾専門学校生などと打ち合わせを持ちながら、さをり織り事業の確立に取り組んで行く予定だという。当面は、50～60歳代向けの嗜好に合わせた製品作りを進めて行く予定だが、若い感性を活かすことによって、新しい市場も開けていくかもしれない。

販売力強化という難題は残っているが、今回のプロジェクトでの最大の収穫は、地域とのつながりを深め、活動の世界を広げたことだろう。地域社会に対する自分たちの役割も見えてきたのではないだろうか。

今回の体験を契機に、どんぐりパンは、さらに大きく世界を広げていくことになるだろう。

■入所施設から地域生活への移行プロジェクト ピープルファースト東久留米

団体名 ピープルファースト東久留米
代表 小田島栄一
設立 2002年4月1日
目的 「障害者である前に人間である」という理念のもと、知的障害者が差別されることなく、不当に管理・拘束される事なく地域の中で当たり前に且自由に生活できる環境作りを目指す。
所在地 東京都東久留米市



○プロジェクトの目的と概要

ピープルファーストはアメリカで生まれた活動である。1973年、知的障害をもつ人たちがオレゴンに集まって、どうやって地域でくらすかについての話し合いがもたれた。この時、参加者の1人が、「知恵遅れ」や「障害者」ではなく、「私はまず人間として扱われたい（ピープル・ファースト）」と言ったことから、「ピープル・ファースト」という名前ができたという。その活動が日本にも広がり、知的障害をもつ人たちが集まって、活動を始めたのである。

ピープルファースト東久留米は、東京の東久留米市を拠点にして、知的障害のある人が生まれ育った地域で暮らせるようにする活動に取り組んでいる団体である。代表の小田島さんご自身が、知的障害があり、実際に入所施設から地域に出てきた経緯がある。その経験から、施設で暮らすより地域で暮らすことがどんなに人間らしく、楽しく、素晴らしいことか、実感したという。その喜びを、施設に入居している多くの知的障害のある人にも感じてほしい。その思いが活動の出発点である。

現在、東久留米市周辺に住民票を置きながら、実際には別の地域の入所施設で生活されている知的障害のある人が、地域に生活の場を移行することを支援する活動に取り組んでいる。実際に、その実例をつくりだしたいというのが、今回のプロジェクトの目標である。

○活動内容と成果

活動は、東久留米市周辺に籍を置きながら、入所施設で生活されている人に連絡を取り、施設を訪問し、本人の地域生活への意思確認を行なうことから始まった。

施設での生活になれた人にとっては、地域生活といってもいろいろと不安がある。そこで、実際に地域生活をしている人のビデオなどを使って、本人に合わせた形での地域生活の仕方を具体的に説明してやる必要がある。そして、本人の希望を踏まえながら、地域生活体験を数回行ない、徐々に地域生活に馴染んでもらうようにしていくことにした。地域生活への希望が強くても、こうした移行プログラムをしっかりとつくとおかないと、結局は施設に戻ってしまう結果にもなりかねない。

こうした用意を整えた上で、入所施設から一人暮らし、またはグループホームに生活の場を移行し、地域生活を実行するというのが、小田島さんたちの計画である。まずは、1人でもそれが実

現できれば、大きな成果である。

いくつかの施設を訪問したが、問題が問題だけにそう簡単に実現する話ではない。本人も希望し、施設側も理解を示しても、家族が反対する傾向も強い。家族との話し合いや説得で時間がかかり、なかなかスムーズに移行できず、施設を出たいと思っている本人を待たせてしまっているのが現状である。しかも、一人ひとり事情が異なり、地域移行の取り組みといっても一様ではなく、別対応が必要だ。予想以上に時間がかかり、残念ながら、5月現在ではまだ、地域生活移行は実現していない。

しかし、地域移行を進めていこうとしている施設からスタッフや親が相談にやってきましたり、小田島さんの講演を聞いて、ぜひ東京に戻りたいという三重県の施設の入居者が体験宿泊に来るなど、さまざまな成果が出はじめている。

小田島さんたちにとってもっと大きな成果は、本プロジェクトを通して、様々な入所施設関係者や当事者、地域支援をおこなっている団体と関係を持つことができたことである。施設の現状も体験できたし、入所者の地域移行への強い希望も聞くことができた。これは、これからの活動にとって大きな財産である。

○これからの展開

当面の課題は、現在、体験宿泊などに来ている人の地域移行を実現することである。それと並行して、地域移行を望む人たちを集めてグループホームをつくり、それを地域移行への足がかりにしていくことにも取り組みたいと小田島さんは考えている。そのために、行政にも働きかけていくつもりだという。

今回のプロジェクトは、各地でピープルファースト活動に取り組む仲間が応援してくれた。ネットワークの大切さを実感した小田島さんは、ピープルファーストの活動を全国に広げるために、ピープルファーストジャパンを作り、地域移行のための基盤作りを実現したいとも考えている。

どんな人でも自分のやりたいことをやることのできるノーマライゼーション社会に向けて、今回のプロジェクトの意義は大きい。地域移行の実現は、もう少し時間がかかりそうだが、今後も注目していきたい活動である。

■いのちをささえあうコミュニティづくり

－自分らしいエンディング実現のための相互支援プロジェクト－

大蓮寺・エンディングを考える市民の会

団体名 大蓮寺・エンディングを考える市民の会
代表 秋田光彦
設立 2003年1月1日
目的 誰もが安心してよりよいエンディングを実現するために、お寺を核とする、いくつかのNPOが連携したサポートネットワークで、市民との相互支援を行い、エンディング文化の社会化を図ること。
所在 大阪市天王寺区
ホームページ <http://www.dairenji.com>



○プロジェクトの目的と概要

「エンディング」。大蓮寺・エンディングを考える市民の会の事務局長の田中いずみさんは、まだ若いにもかかわらず、この言葉にとっても惹かれている。エンディングとは、人生の完成期。したがって、「エンディングを見つめること」は「今をいかに生きるか」という、世代を超えて共通する命題につながっていると、田中さんは考えている。

そもそも、大蓮寺・エンディングを考える市民の会は、人生の完成期ともいえるエンディングの問題を社会化し、血縁にとられない結縁（けちえん）のコミュニティづくりによって、誰もが安心して今を生き、自己の人生の完成をめざせる豊かな社会を実現しようという思いで、5つのNPOが集まって生まれた組織である。

言葉はともかく、これまで死に関しては、いわば議論がタブー視される傾向があった。しかし、しっかりした今を生きるためには、死は避けて通れないテーマである。それに、死は決して、個人だけの問題でもない。

今回のプロジェクトは、そうした「エンディング文化の社会化」に取り組むための、いわばキックオフプログラムとも言えるだろう。具体的な目標としては、専門性を持つNPOの情報発信と自分らしいエンディング実現をめざす市民が交流できる場としての「エンディング見本市」の実現が設定された。

○活動内容と成果

エンディング文化といっても、まだ一般には馴染みは少ない。一挙に見本市を開催しても、効果は出しにくい。そのために、見本市に向けての周到なプログラムが用意された。

最初に取り組んだのが、専門性を持つNPOと一緒に開催した「エンディングセミナー」である。成年後見制度や在宅ホスピスケアなど、さまざまなテーマに付いて、参加者と一緒に考える機会をつくった。8回のセミナーへの参加者はのべ155人。かなりの手応えだった。

並行して、参加者相互にエンディングに関心を持ったきっかけ、看取りの経験などを語り合うエンディング交流会も開催した。2月には、「私の葬儀プラン」をテーマにしたワークショップも実施した。参加者がそれぞれに、自分らしい葬儀を考える、このワー

クショップは、参加者に大きな影響を与えることになった。

そうした活動を積み重ねながら、2004年4月に、エンディング見本市を開催したのである。これまで接点を持った多くの団体や個人を巻き込みながら、協力者を広く呼びこんでいくスタイルで、コムケア流の「共創型」と言っている。

当日は、会場となった大蓮寺の本堂に実際の葬儀式場を仕立て、葬式全般の流れや家族葬などさまざまな形態を紹介する模擬葬儀をはじめ、「これからの時代のエンディングサポート」をテーマにしたシンポジウム、エンディングに関係するさまざまなNPOの活動発表と展示など、多彩なプログラムが展開された。

参加者も480人と、エンディングに関する関心の強さも改めて実感できた。参加者からも、「今までずっと心の奥で思っていたけれど、誰にも話す事が出来ずにいました。同じ様に考えている人達との出会いや、思いを話す事が出来て心が少し落ち着きました。たくさんのお意見の中からじっくり『自分はどうしたいんだろう?』と考えていきたいと思えます」といった感想も届けられた。

参加者が多かっただけではない。事務局長の田中さんは、「何より参加者の意識に『自己決定』の自覚が感じられたことがうれしかった」と語っている。

○これからの展望

活動はまだ始まったばかりである。しかし、今回の見本市では、企画段階から多くの参画者を得たことで、エンディングの社会化に向けてのつながりが深まったことが大きな成果だった。

新しいネットワークも広がった。いくつかの男女共同参画推進センターからも、エンディングとジェンダーをテーマとしたワークショップ開催の依頼も入っている。

テーマの持つ新しさ、社会的な意義から、新聞やテレビが盛んに取り上げてくれたことも大きな成果だった。おかげで、多くの人に活動が認知されることになった。エンディングの社会化に向けて、大きな一歩が踏み出されたと言っている。

田中さんは、いま、始動から見本市開催にいたる活動全体の成果を冊子にまとめている。その作業の中から、きっと次の展開の構想が見えてくるだろう。楽しみなことである。

■「あい・あい・キッズ・パーク」事業

子育て支援ネットあい・あい

.....

団体名	子育て支援ネットあい・あい
代表	宇野ゆかり
設立	2001年11月1日
目的	小学生の居場所づくりに、立場や世代を超えた地域住民が関わることで、子どもたちの豊かな育ちを支援するとともに、子育て支援を通して世代をつなぎ、誰もが安心して子育てができるようなまちづくりを目指す。
所在	京都市伏見区

.....

○プロジェクトの目的と概要

子育て支援ネットあい・あいは、これまで子どもを主役にしたイベントやフリーマーケットを春休みや夏休みに開催してきたが、今回のプロジェクトは通年の活動である。題して「あい・あい・キッズ・パーク」。学童保育の対象外の小学生や障害児を中心に、放課後の居場所を地域の人たちと一緒につくっていこうというプロジェクトである。

単なる子育て支援活動ではない。地域住民の参加を促進するためのメニューもいろいろと考えている。たとえば、菓子づくりやパソコン指導など、みんなが持っている得意なことを提供してもらったり、中学生を含む学生ボランティアを募ったり、商店街とも連携した地域通貨的な仕組みを活用したり、プログラムは多彩である。

居場所についても、大人だけで決めるのではなく、「あったらいいな、こんな居場所」というテーマで、子どもも参加してもらってワークショップを開催して、決めていくことにした。地域社会との協働が基本方針である。

そして、2004年春に、「あい・あい・キッズ・パーク」をオープンする計画だった。

○活動内容と成果

「キッズ・パーク」のプログラム内容をどのようなものにするか。これは、このプロジェクトを方向づける重要なテーマである。そこで、これまで行ってきた「こどもエコくらぶ」や「夏休みこどもベンチャーくらぶ」に参加した小学生たちに、放課後は何をしたいのか聞いてみた。遊びもしたいし、ゲームもしたい、おやつも食べたい、などたくさんの意見が出てきた。なかには、「学校が終わってほっとしたい」という声もあった。

当初の計画では、教育系プログラムを放課後に組み込む予定だったのだが、子どもたちは思い切り遊んだり、ほっとなごんだりする場を望んでいる。今の子どもたちの置かれている実態を改めて思い知らされた。そこで、放課後は地域の人たちとのふれあいを大切に、あたたかな居場所を目指す方向に変更した。そして、教育系プログラムは、土日や長期休暇の別プログラムとすることにした。

みんなが参加しやすい仕組みづくりでは、当初、地域通貨的な「さぼーたーちけつ」を考えていた。商店街の人たちと話し合っ



ているうちに、「まちじゅうみんな子育て支援」の実現のためには、「通貨」や「マネー」の概念は必要ないという結論になり、自分たちで独自の仕組みを構築することになった。

この議論のおかげで、子育て・子育ての支援活動を商店街が応援する姿勢が強まり、地域みんなが子育てを支えるという意識を共有することができたことは大きな成果だった。そして、地元商店街振興組合との提携が実現し、ボランティア活動を応援する「さぼーたーちけつ」ができあがった。

こうした準備を進めて、いよいよ具現化に動き出す段階になって、代表の宇野さんが体調を崩してしまった。市民活動による新しいプロジェクト起こしの場合、どうしても中心になって活動している個人に負担がかかってくる。宇野さんの場合も過労が原因だった。プロジェクトが軌道にのる前だったので、代表が動けなくなったことで、プロジェクトは一時中断してしまった。思いが先行し、推進体制づくりがどうしても後手にまわりがちな市民活動が時に陥ることである。

宇野さんの回復をまって、プロジェクトは再開した。しかし、立ち止まったことで、これまで見えなかったことも見えてきた。「キッズ・パーク」の本格展開は先に延ばし、当面は、月に数回の「キッズ・パーク」開催に取り組みながら、改めてプロジェクト全体の再構築に取り組んでいくことになったのである。

○これからの展望

「さぼーたーちけつ」の仕組みを考える過程で、宇野さんは、今の子育ての環境に決定的に欠けているものは、子育てを受け継ぐ「場」ではないかと思うようになった。大家族や地域社会の中で自然と受け継がれてきた人の営みが、場を失うことで途切れて立ち往生しているように感じる。だからこそ、子育て支援には、世代を越えて、時を越えて、今ここの経験が「受け継がれる」ことが大切なのではないか。それこそが、持続可能な地域づくりにつながっていくはずだ。

プロジェクトの実現は先延ばしになったが、これまでの活動で得たものは大きい。地域社会が本来持っている力の大きさにも気づくことができたという。その力を取り戻すために、このプロジェクトがこれからどう展開されていくかを注目していきたい。

■ホスピタルアート・プロジェクト (病院内におけるアート・プロジェクト)

Wonder Art Production

団体名 Wonder Art Production
代表 高橋雅子
設立 1999年1月1日
目的 教育や医療施設などあらゆる現場に、アートを媒体として癒しや感動、ポジティブなエネルギーを届け、人間が本来持つ善性と活力を引き出し、心豊かな地域社会づくりの一助となる活動を行うこと。
所在 東京都品川区
ホームページ <http://www11.ocn.ne.jp/~wap/>



○プロジェクトの目的と概要

Wonder Art Production 代表の高橋雅子さんは、アートには社会を大きく変えていく力があると確信している。これまで、世界中の子どもたちの絵画を集めて自分たちの展示会を創るワークショップやアートと自然体験をリンクさせた環境教育活動など、さまざまな活動に取り組んできた。

今回の舞台は病院である。これまでの活動でつくられてきた、アーティストのネットワークやワークショップのノウハウを活用して、病院をもっと気持ちのいい場にしたいというのが、今回のホスピタルアート・プロジェクトだ。

アートセラピーは、日本でも少しずつ広がってきているが、高橋さんが考えているホスピタルアートは、病院そのものを対象としている。日本の医療環境は、欧米に比べると、ハード優先でソフト面のフォローが遅れている。病院に行くだけで、気が抜かれてしまうような重苦しさもある。患者だけではない。そこで仕事をしている医師や看護師も疲れるのではないかと。そうした現状を変えていくために、患者と医療関係者、地域の人たちが、一緒になってワークショップを実現し、アートを通じたストレス解消にもつながる作業とコミュニケーションの場を提供したい。そして、創造的で癒しのある時間と空間を共創しながら、病院を元気がもらえる場にしていきたいというのが、高橋さんたちの思いである。

○活動内容と成果

日本の病院は忙しすぎて、高橋さんたちの思いには共感してくれども、実際に場所を提供してくれるところは多くないのだが、今回は、幸いに済生会栗橋病院（埼玉県）が一緒に取り組んでくれることになった。

栗橋病院の本田宏副院長もまた、日本の病院のあり方を変えていきたいという思いを強く持って、活動をしている人である。高橋さんたちの思いに、即座に共感してくれて、3回にわたるワークショップが実現できることになった。プロジェクトの名前も決まった。「ハートフルプロジェクト」。栗橋病院の院是「心」に由来している。

病院にはさまざまな人がいるから、準備には慎重が必要である。患者のためと思っても、その受け取り方は、置かれている立場や状況でさまざまである。医療の現場でもあるから、患者や医療関係者の事情も十分配慮しなければいけない。アート活動に使う

塗料なども、低刺激の安全なものを選ばなければいけない。

そのため、病院側にもしっかりした体制をつくってもらった。本田副院長が医療関係者の、また総務部と用度管財部の担当者が管理関係の窓口になってくれたおかげで、準備も滞りなく進めることができた。

最初のワークショップは、2003年10月18日（土）。病院の総合受付前の廊下に色とりどりのハートを描くアートワークショップだった。自らも病気を抱えているアーティストの一瀬晴美さんが、ワークショップを盛り上げてくれた。参加者は、医師、看護師、病院職員、入院患者、その家族など、多彩であり、初めてのワークショップだったので、戸惑う人もいただろうが、とても好評で、多くの人に元気をあげたことは間違いない。

患者の家族から、「前日まで熱を出して寝ていたのに、今日はとても楽しそうな子どもの笑顔が久しぶりに見ることが出来てとても嬉しかった」という感想も届けられた。また、「病院内の変化、進化に感動した」「病院に足を運びやすくなる雰囲気になった」という声もあった。確かな手応えを感じられたことが、何よりの成果だった。

病院の機関誌でも活動は報告され、当日参加できなかった医師や看護師にも関心をもってもらうことができた。ワークショップは、その後も2回実施したが、参加者は回を追うごとに増えている。そのおかげで、ワークショップはさらに継続していくことになった。

○これからの展望

この活動での最大の収穫は、ホスピタルアート活動の大切さと効果を改めて実感できたことだ。事務局の岩田美香さんは「単に外から持ち込んだアートでの改善ではなく、患者や病院関係者が自ら主体的に関わって環境改善していくので、完成した時の感動もひとしお。また、あらゆる立場（患者、医師他病院関係者、家族など）の方々と一緒に同じ作業に関わることで垣根を越えた交流を持って、それが楽しい雰囲気を作り出した。その雰囲気が作品と一緒に一層効果的なプロジェクトになったと思う」と話している。

栗橋病院の活動は、いくつかの新聞やテレビで取り上げられた。そのおかげで、他の病院からも問い合わせが入るようになってきたという。

今回のプロジェクトが契機になって、全国にホスピタルアートの風が広がっていくことを願っている。

■地域情報検索システムの構築

NPO法人にこここキッズ (代表 畑山眞由美)

<http://www.niconiko.jp>

近隣とのコミュニケーションが薄れ、核家族化が進む中で、相談する相手がないまま、育児の不安を抱えている母親や家族が増えている。にこここキッズは、そうした家族たちを支援する活動に取り組んでいる。

今回のプロジェクトの目標は、障害をもつ児童も含めて、子育てのための支援や情報を集め、データベース化し、だれでもが利用できる情報検索システムをホームページ上に構築することである。それも単なる情報収集ではなく、子育て関係の施設や組織などを実際に取材し、母親の目を通しての、「心の通った」情報や

感想をデータベース化していこうというものである。当面は埼玉県を中心に展開している。

現在、幼稚園の全国情報の収集が終わり、6月から情報提供が始まる。今秋には、携帯サイトでの情報配信も始める予定。地域情報の取材に関しては、子育て中のボランティアママスタッフを募り、情報収集を加速する計画。今回つくったものを土台にして、これから内容の充実や掲載地域の拡大を図っていく予定である。

■「発達障害児に公共遊園施設を経験させたい」プロジェクト

ささゆりの会 (アスペ・エルデ親の会 東三河支部) (代表 近藤美佐緒)

<http://www12.ocn.ne.jp/~aspsasa/>

ささゆりの会は、軽度発達障害を持つ子どもたちの一貫した療育・自立を目指し、専門家の指導を受けながら、地域に密着した活動に取り組んでいるグループである。

発達障害を持つ子どもたちは、大きな声を出したり、パニックになるなどの行動をとることもあり、家族だけではなかなか遊園施設にも行きにくい。そこで、会のみんなで、しっかりした準備と体制を組んで、公共遊園施設を楽しみに行こうというのが、今回のプロジェクトである。同時に、集団行動や社会のルールを学ぶことも大きな目的である。

当日のグループ行動に向けて、予め「自分勝手な行動をしない」などのグループ目標と、「大きな声を出さない」「立ち止まらない」などの個人目標を決めた。そうした準備のおかげで、30人を超える参加者は、トラブルもなく、みんな遊園施設を楽しむと共に、たくさんのことを学ぶことができた。

これからも、場面を変えたりして（例えば美術館や映画館など）実際の体験が出来る機会を多くつくっていきたいと考えている。

■環境・助け合い・健康グループによる町づくりプロジェクト

桜プロジェクト「われら活動隊」(代表 錦織三千男)

<http://www6.ocn.ne.jp/~sakura93/>

「われら活動隊」という勇ましいこのグループは、滋賀県草津市桜ヶ丘の町内会の有志がつくった熟年チームである。「みんな元気で、楽しく、にぎやかに」をモットーに、世代を超えた連帯感のある活動に取り組みだして、まだ1年。3つのグループ(環境・助け合い・健康)に分かれて元気な活動を展開している。

今回の活動は、それぞれのグループを広げていくことで、町民の間に「草の根運動」を定着させていこうというのが目的である。環境グループは毎月の環境整備清掃作業の他に「環境家族(家



庭版ISO」への取り組み(2割以上の家庭が参加)、助け合いグループはパソコン教室の実施、健康グループは毎日の防犯夜間パトロールと町内ウォーキングラリーの実施と、個々の活動はそれほど目新しいものではないが、まちづくりを行政に任せておくのではなく、町内会が主役になって取り組んで行こうという意気を感じさせる。

継続は力なりと、錦織活動隊長はこれからも活動を広げ、町民の間に大きなねりを起こしていきたいと語っている。

■畑のフリースクール

エコ・ライフ夢幻村（代表 西崎幸男）

<http://www.h5.dion.ne.jp/~umaki/>

日本の風土に適したパーマカルチャーを構築し、普及することによって、自然と調和した持続可能な生活づくりと町づくりを目指し、地域の活性化、地域づくりの実現に寄与する。これがエコ・ライフ夢幻村の目的である。

代表の西崎さんが今回取り組んだのは、「畑のフリースクール」。高齢者と不登校生が自然とふれあいながら、協働作業を通して異世代交流を行うプロジェクトである。当初はニワトリ小屋をつくり、卵ひろい牧場の実現を考えていたが、残念ながら一部助成になったため、内容



を変更し、炭焼きを中心にすることにした。

高齢者と不登校生が協力して、間伐作業や炭焼きに取り組んだが、炭焼き講師にも協力してもらい、2月には竹炭ポット、3月には花炭焼き、さらには竹炭ポットや建築廃材での木目ポットの試作と、次々と新

しい課題に挑戦している。

今後は、不登校生だけでなくだれでもが参加できるふれあい作業場として整備拡大させたいと考えている。

■「救急救命活動シンポジウムと講習会」の開催

セントジョンアンビュランスジャパン協会（代表 森田松太郎）

<http://www.d3.dion.ne.jp/~stjohn9/>

セントジョンアンビュランスジャパン協会は、自然災害や人的災害に対するファーストエイド（応急手当）の教育普及と啓蒙活動に取り組んでいる団体である。日本では、一般市民に対する公開訓練はあるが、駐日大使・公使館員に対する講習会は行われていない。そこで今回は、駐日大使・公使館の館員を対象とし、併せて一般市民も対象に、救急救命活動シンポジウムと講習会を実施することになった。

10月のシンポジウムを皮切りに、5回にわたる救急救命講



習会を開催したが、米国大統領来日の時期に重なったりして、参加人数は予想よりも少なかったが、受講者は非常に熱心であり、講習会への評価も良好だった。また、この事業を契機に、協会と受講者や近隣住民とのつながりも広がり、協会の活動基盤強化にも役立つ効果があった。

世界一の実績と会員数を誇り、欧米では周知のセントジョン アンビュランスの研修を、日本語と英語で実施できたことは、協会のこれからの活動にとっても大きな意味があったという。

■「まちがだんだんみえてくる～市民がつくる地域福祉計画」

学習会モデルプログラムづくり

NPO法人 さいたまNPOセンター（代表 赤石和則）

<http://www.sa-npo.org/>

さいたまNPOセンターは、「一人の声をみんなの課題に」をスローガンに、市民自らが地域の課題を発見し、解決できるような社会を目指して、さまざまな市民活動を支援しているNPOである。

今回のプロジェクトでは、地域福祉計画を市民主体で進めるまちづくりの担い手を増やすため、「地域福祉計画」学習会のプログラムを開発するとともに、各地での開催を呼びかけてプログラム提供（講師派遣）を実施することである。

市民研究会「地域福祉計画たちあげ隊」の中に、学習班を結成し、寸劇やワークショップなどの参加型プログラムを中心にして、各地の「はじめの一步」を応援する活動を展開した。

こうした活動は、行政、社協、NPOがバラバラに取り組んでいる傾向が強いが、それらが連携した取り組みが必要だと改めて実感したという。

今回の活動を踏まえて、今後は、小地域単位の継続的な活動を進めながら、社協との協働を考えていく予定である。

■「メロウ伝承館」の構築

メロウ倶楽部（代表 中村克己）

<http://kousei.s40.xrea.com/xoops/index.php>

平均年齢 64 歳のシニア・ネットワーク 400 名で構成するメロウ倶楽部は、情報化の支援によってシニアの社会参加を促進し、活力に溢れた日本型長寿社会の構築に貢献することを目指しているグループである。

現在のシニア層が、戦中戦後、高度成長期を通じて経験した日常生活に関する知見を、全国に開いたネットを介して集め、データベース化し、後世の参考に供する「メ



ロウ伝承館」を作ろうというのが、今回のプロジェクトだ。単に情報を集めただけではなく、それを題材にみんなが当時のことを語り合うスタイルになっているため、生き生きとした情報が集積されてきている。「実録・個人の昭和史」の投稿も 10 編を超えた。

メロウ倶楽部としては、この活動を次の世代のシニアへと順次引き継いでいき、50 年、100 年先の世代のために役立てることを目指している。さらに、この活動を日本だけではなく、世界にも広げていきたいという計画である。

壮大なプロジェクトのはじまりとっていい。

■ピポ・ユニバーサルミニ駅伝

コミュニケーション・スクエア 21（代表 叶内路子）

<http://www.npocs21.com>

ノーマライゼーション社会の実現を目指して、貴重な体験と豊富な知識をもつ「50+」（フィフティ・プラス）（団塊の世代プラス）が中心となって社会に働きかけていく。これがコミュニケーション・スクエア 21 のミッションである。

年齢・性別・国籍・障害の有無を超えて、共に支えあう共生社会の心地よさを体験する機会を提供しようと、2002 年から開始したのが「ピポ・ユニバーサルミニ駅伝」。タイムレースではなく、小学生、高齢者、車いす使用者、視覚障害者、健脚者の 5 人がチームをつくり、自分たちで定



めた目標タイムに最も近いゴールを目指す。無理なく楽しく仲間と過ごす一日は、特に障害を持つ参加者にとって大きな自信となるようだ。

今回は、20035 年大会の報告書を作成し、今年計画している第 3 回大会に向けての準備活動に助成金を活用した。このような草の根的ユニバーサルスポーツを通して、ともすれば孤立しがち社会から、だれでもが安心して地域に出ることができる快適な社会へと変えていくために、ピポ・ユニバーサルミニ駅伝をこれからも継続していく予定だ。

■癒し系テディベアコンテスト

NPO法人 カドリーベア・デン・イン・ジャパン（代表 竹澤泰子）

<http://www.ne.jp/asahi/gbwj/cbd>

優しさと温もりを持つテディベアを作ったり（テディベアメイキング）、贈ったり（テディベアギフトング）することを通して、人びとに心の安らぎと温もりを広げていく活動に取り組んでいるのが、カドリーベア・デン・イン・ジャパンである。

今回は、これまでベアメイキングに参加してくれた人や全国のベアを愛する人たちを対象に公募し、心をこめて手作りのベアのコンテストを実施した。題して「癒し系テディベアコンテスト」。米国からの出品も含めて、全国から 200 体におよぶ個性的な作品が集まった。



カドリーベア・デン・イン・ジャパンにとっても初めての試みだった。作品は 3 日間、群馬県庁の NPO サロンで展示し、300 人を超す人が見に来てくれた。展示と並行して、ベア作り体験教室も行った。最終日には表彰式とパーティを開催。最後のパーティとアメリカの教会のゴスペルシンガーのコンサートは参加者の心に感動を与えた。

この活動を通して、カドリーベア・デンの理念や活動を広くアピールすることができた。この活動がますます広がって行くことを期待したい。

■「フリーリバースクール」プログラムづくり

湘南コミュニティサポートセンター（代表 大津明）

<http://members.jcom.home.ne.jp/scsc/>

湘南コミュニティサポートセンター（SCSC）は、地域社会が展開する様々なコミュニケーション活動に対して、必要なノウハウ・人材・機材・場所・情報等の提供に関する事業を行い、支えあいにあふれた地域社会（コミュニティ）の再生、創造に寄与していくことを目的として、神奈川県湘南地域を中心に活動をしている団体である。



場として、神奈川県内を流れる相模川を舞台に、フリーリバースクールの常設を目指しているが、今回は、そこでの提供プログラムの開発を目的に、現場実習を中心にした研究会を行った。また、実際にフリーリバースクールを展開する予定の相模川のフィールド調査を行った。

SCSCは、コミュニケーション力「（他人と協働できる、誰かの役に立てる、自然と人間のつながりを知っている、自分で自分の身を守れる）こそが、「生きる力」だと考えている。その獲得の

にフリーリバースクール in さがみを計画。県内 25 か所の児童養護施設に参加を呼びかけ、2 か所が正式参加。3 か所が参加調整中である。

こうした活動を踏まえて、今年 8 月

■市民の目で評価調査した高齢者施設の情報公開

NPO法人 福祉を拓く会 GOWA（代表 岡本仁宏）

<http://www.gowa.org/>

GOWAは1999年に設立され、介護保険下で利用者市民が的確な介護サービスを選択できる条件をつくらうと活動している団体である。

その活動の一つが、地域福祉力向上のための介護サービス市民型第三者評価事業。今回は、その活動を広げていくために、市民にもっとも身近なステップである「市民評価」の基本的な考え方や方法、実施結果などをWEB上で公開するプロジェクトに取り組んだ。これにより、全国の市民団体に広く市民評価の考

え方と手法を周知させることが目的である。

京都府加茂町との協働で取り組んだ介護事業対話評価推進事業では、これまでの成果を踏まえて、市民評価の手法を導入し、成果を上げたが、こうした事例もWEBで公開して行く予定だという。

まだ市民評価の手法などの入力が終わっていないが、現在、データベースを作成中。これまでの成果は、報告書にして6月には発行する予定である。

■「私と町の物語」

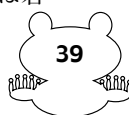
クリエイティブ・アート実行委員会（代表 山海保）

クリエイティブ・アート実行委員会は設立してから14年、これまで参加型のアートスクールやコミュニティアート活動のリーダー育成活動など、さまざまな活動を行ってきた。

今回のプロジェクトは、地域の世代間コミュニケーションを促進する町の写真展「私と町の物語」の開催である。舞台は都市再開発が進み、住民と地域とのつながりが希薄になりつつある東京の港区。港区に在住もしくはゆかりのある120名の高齢者の写真&物語を学生によるインタビュー活動で収集し、展示した。そのため、区内の公立小中学校の生徒たちにも呼びかけて、インタビュー活動や各地域での聞き書きプロジェクト、町発見プロジェクトなどに参加してもらった。併せて、参加アーティストによるパフォーマンスやトークショーなども開催。イベントには若

い世代の参加者も多かった。

世代間コミュニケーションをはかり、新住民と旧住民の交流を深めることができる、この活動はこれからも継続して展開して行く予定である。



■まちだNature & Human Project

まちだ市民発電所 (Mcepp) (代表 おかざきさゆり)

まちだ市民発電所(略称 Mcepp: Machida Civil Electric Power Plant)は団体やグループという形をとっていない。人間は一人ひとりの人生を生きながら、多くの人と様々な体験を共有し、痛みをわかちあい、力をあわせ、一人ではできないことを実現していく力を持っており、そうした小さな思いが一つにつながるときに無限のパワーが生まれる、という代表のおかざきさんの思いから、緩やかなネットワークでつながる個人の集まりのまま活動を展開している。

今回のプロジェクトは、そのおかざきさんの思いから出発して

いる。目的は、市民による私募債発電所に地域通貨を連動させ、人と自然のエネルギーが循環する仕組みを作ることである。

これまで市民共同発電や地域通貨の分野で活躍している人々を呼んでの研究会を重ねてきたが、町田市にある福祉関係の施設などから市民共同発電の設備設置の相談も来始めており、具現化に向けての動きが始まっている。

研究会は、自然農法や福祉関係者など、参加の輪が少しずつ広がっている。地域通貨を活用できる野菜市の計画も進行中。ともかくこれからの発展が楽しみなプロジェクトである。

■RGEEAネイチャーリーダー養成講座

水族館環境教育研究会 (RGEEA) (代表 安田晋)

水族館環境教育研究会(RGEEA)は、「水族館内外における環境教育」に取り組む、水族館を愛する市民のグループである。環境保全と改善に向け、より多くの人に必要な知識、価値観、実行力、技能を獲得する機会を提供することを目指して、活動を開始した若いグループだ。

今回のプロジェクトはネイチャーリーダー養成講座。これから海をはじめとする自然環境についてより深く「親しみ、知りたい」、環境保護・保全活動について「行動し、人々に向けて普及したい」、という人を対象とした合宿講座である。参加者に、海や海を

取り巻く自然環境や「真の意味でのナチュラルリスト」とは何か、を考えてもらいたいというのが目的である。

初めての大型プロジェクトであるため、講座実現のために、関係者による入念な内容打ち合わせ会議を重ね、現地の視察も踏まえて、3月に実施した。参加者は9人。少人数で密度の高い講座が実現できた。そのおかげで、スタッフと参加者との間で新たなイベントの企画も持ち上がりつつある。

これからも年1回のペースでより発展的な形式での講座を実施する予定になっている。RGEEAの順調な発展を期待したい。

■アートインストラクター人材バンク立上げと縁むすび事業

NPO法人コンカリーニョ

<http://www6.et.tiki.ne.jp/~concarino>

コンカリーニョは、北海道札幌市を拠点にして、芸術文化活動を有効に活用したコミュニティ形成を目的とし、さまざまな分野の人や団体と幅広く連携しながら、その縁結びをしつつ、芸術文化関連事業とコミュニティ拠点となる劇場再建事業を行っている。

今回は、体験型アートプログラムを広げていくための体制とプログラムづくりが目標だが、その先には学校や施設などへのアートインストラクター派遣を継続的に行っていくアート系インストラクターワーキンググループの立上げを目標として置いている。

演劇、音楽、ダンス、美術など、様々な分野のアーティストに呼



びかけ、ワーキンググループを組織し、それぞれの活動実績を持ち寄ってプログラム開発を行った。

並行して、関係団体、関係者へのヒアリング調査、さらにはインストラクターの先行派遣などにより、体験型アートプログラムへの評価やニーズ調査も行い、障害者・高齢者向けの体験型アートプログラムの展開の準備も進める

ことができた。

効果的なプログラム開発のためには、教育や福祉の関係者との連携も必要だが、そうしたつながりも少しずつできてきた。これからの展開が楽しみである。

■みんなで暖まろうよ!『冬籠り祭』

主催 NPO法人 かすたねっと (広島県:代表 折口智朗)

<http://www.viva.ne.jp/home/casta/>

開催日 2004年1月18日(日)

NPO法人かすたねっとのテーマは「あたたかなまちづくり」。「困ったときはお互いさま、助けたり助けられたり」の精神を大切にして、ゆっくりだが、着実な活動を展開している。

今回のイベント「冬籠り祭」にも「みんなで暖まろうよ!」という呼びかけがついているように、かすたねっとはいつもみんなで楽しむ姿勢をととても大切にしている。

イベントの内容は、沖縄のエイサーの演奏、琴と尺八の演奏、田舎芝居、比婆荒神神楽と楽しさ満載だが、参加してくれた人たちにボランティア活動やNPOについても理解を深めてもらおうと、活動紹介の展示も用意し、話題づくりも怠りない。

企画から運営まですべて手作り。まわりに呼びかけたところ、30人以上のボランティアスタッフが協力してくれた。演奏や芝居など演ずるのもみんな仲間である。といっても、初対面で、遠くの町から参加してくれる「仲間」もいる。人のつながりを大切にすることをかすたねっとの面目躍如である。

企画者の折口さんは、この冬籠り祭にお年寄りやハンディを持

つ人たちにたくさん集まってもらい、演じたり観たりして楽しんで

もらうとともに、みんなひとりぼっちではなく、いつも誰かが隣にいて助けてくれることに気づいてもらおうと考えたのである。

当日は、風は冷たいものの良いお天気。120人も人が参加する盛会になった。一人暮らし高齢者が20名、なんらかのハンディをもつ人が30名。演ずるものも観客も、いつの間にか一体となって一緒にエイサーを踊りほどの盛り上がりで、折口さんの思いは予想以上に実現した。余るほど用意したはずの猪汁も、会が終わる頃には大きな鍋が空っぽになったという。

参加者と同じく、かすたねっともこのイベントから大きな元気をもたらした。折口さんは「社会にあるさまざまな問題をみんなが共有化するところまで辿りつけるように、お互いが支援し支援される双方向的な関係作りを目指して、さらに活動を広めていきたい」と語っている。



■ちばNPOユースフォーラム

主催 コミュニティアート・ふなばし (千葉県:代表 下山浩一)

<http://www.communityart.net>

開催日 2004年2月11日(水)

千葉県船橋市で、コミュニティアートを切り口にして活動しているコミュニティアート・ふなばしが、若者のコミュニティ参加を目指して、毎月開催しているサロン「cafe-3-」ももう2年続いている。その「cafe-3-」に集まった若者たちのネットワークから自然発生的に生まれたのが、「ちばNPOユースフォーラム」である。

社会参加の一つの方法として市民活動に取り組み始めている若者が増えてきている。そこで自分のやりたいことを見つけ、活動している若者も多い。しかし、その一方で、障害や国籍の違いによって社会から排除されたり、ひきこもり、犯罪に追い込まれるなど、社会に関わりをもつ場がない若者も多い。一度、同世代の若者が集い、交流しながら、これからの若者の社会参加について考えよう。これがみんなの思いだった。

企画から運営まですべて、そこに集まった若者たちの手づくりである。呼びかけに応じて、若者が主体的に運営するNPOや若い力を求めるNPOなど、県内を中心に30の団体が協力してくれることになった。



当日は、NPO関係者に加えて、企業や行政、大学などから166人も人が集まった。ポスターによる各団体のプレゼンテーション、様々な分野で活動している若者たちから「若者の社会参加とNPO」をテーマにした基調レポートに続き、福祉・まちづくり・コミュニティビジネスなど7つのテーマに分かれて参加者同士が語り合うラウンドテーブル・ディスカッションが行われた。

ラウンドテーブルでは、若年層が新しい社会参加のあり方を、自ら見つけるための場づくりについて、議論が盛り上がった。そして、最後に次のステージに向けてのステートメントが発表され、参加者全員で承認した。

ステートメントでは次の3つの取り組みが確認された。

- ①様々な環境で生きる若者をつなぐネットワークづくり
- ②若者が自分を活かし自分を試せる場づくり
- ③年に1回のフォーラム開催

「ちばNPOユースフォーラム2005」開催に向けて、若者の柔軟で創造的なネットワーク活動がすでに始まっている。

■「ひだまり」交流会

主催 NPO法人国際比較文化研究所（群馬県：代表 太田敬雄）

<http://www8.wind.ne.jp/mthc/>

開催日 2004年2月28日（土）

2004年2月28日（土）、高崎市行政事務所会議室を会場で「ひだまり交流会」が開催された。主催はNPO法人国際比較文化研究所。

国際比較文化研究所代表の太田敬雄さんは、多文化理解のための研究会や異文化交流の活動に長年取り組んでいるが、国際交流だけではなく、地域社会においてもさまざまな活動がもっと相互につながっていくことが大切だと考えている。

そうした考えから、縦割り社会の横糸となる活動として、異なる分野の活動を学びあい、そして交流を通して繋がりあう場として、「ひだまり」交流会を企画した。様々な団体や個人に呼びかけた結果、15の団体や個人が自分たちの活動を発表してくれることになった。行政や学校法人、さらには調停委員も含まれており、まさにコムケアを目指す「境界を越えた集まり」が実現した。発表はしなかったが、他にもたくさんのNPOや市民活動が資料参加してくれた。

当日は、まさに「陽だまり」を感じさせる暖かな日になった。参加者は幼稚園児・小学生から老人まで50名以上におよび、なかには当日の朝の新聞で紹介記事を読んで駆けつけた人もいた。不思議なことに、奈良から日帰り参加した人もいた。この人は、



国際比較文化研究所の活動に関心を持っていて参加してくれたのだそうだ。

15団体からそれぞれ20分ずつと時間をかけてしっかりした活動紹介してもらったため、多種多様な話題で質疑応答も活発だった。しかし、太田さんが一番重視したのは、昼食タイムと発表後の交流タイムだった。食べながら、くつろぎながら、本音で交流することこそ、横糸が育っていく条件だと太田さんは考えている。丸一日の長

丁場のプログラムだったが、参加者全員、お昼か夕方交流会の少なくとも一方には参加してもらえたことで、太田さんの企ては見事に成功した。

特に、最後の「お茶しながらチョットチャット」では参加者が3つのグループに分かれてテーブルを囲み、農園たおの「マシュウ」窯製のパンを味わいながらのくつろいだ語り合いの時となった。豊かな実りを予感させる沢山の新しいつながりが芽生えた。

まさに「ひだまりの語り合い」といえる交流会だった。参加者からは、早速に継続開催の希望が寄せられた。次回はスタッフとして活動したいという人もいる。これを契機に、年間数回のひだまり交流会が高崎で始まりそうである。

■子ども達と社会を結ぶために ～いろいろな人達どうしの協力を考える

主催 NPO環境ケア設立準備会（東京都：代表 増山博康）

開催日 2004年3月21日（日）

長い名前のイベントである。しかし、何が話題になったかはよくわかる。

主催団体も、いくつかの団体や活動がつながりながら生まれようとしているグループである。コアになっているのは、コムケア活動に様々な形で参加してきた環境クラブとアフタースクールである。子どもたちとの関わりを深めていくなかで、もっと子どもたちと社会とのつながりを広げ深めなければという思いを強めてきたのである。

両者が活動している東京都豊島区では、障害児のケアを行う「アフタースクールの会」やひきこもりに関わる「こどもの会」など



の市民活動が広がっているが、経済的な基盤が弱く、活動を継続するのが精一杯である。しかし活動すればするほど、新しい課題が見えてくる。横のつながりをつくり、相互の支援体制づくり

に取り組んでいくだけでは十分ではない。活動基盤強化のためには、企業も含めて、もっと様々な人たちを巻き込んでいく必要がある。そこで企画されたのが今回のイベントである。

しかし、ただ話し合っても、具体的な成果は出にくい。そこで事前に何を議論するかについてコアメンバーで話し合った。そこで出てきたのが、「地域市民事業基金」づくり。地域での市民事業を支援していく基金づくりである。事例収集したり、NPO、行政、企業などの反応を打診したりして、当日の提案をまとめていった。

当日は、まさに「いろいろな人達」が集まり、これからの市民活動についての話し合いが行われた。切り口は子どもだったが、当

然のように話題は市民活動全般に広がっていった。企業の社会貢献担当者ネットワークのメンバーと障害児ケア団体「まつぼくり」の関係者から、まず話題を提供してもらい、それを材料に、参加者での話し合いが行われた。企業の人とじっくり話し合うことで、お互いに支えあう方策も見えてきたことは大きな成果だったが、提案した「地域市民事業基金」も様々な視点から議論してもらい、方向性が見えてきた。

今回のイベントは極めて地味な、話し合いになったが、踏み込んだ議論ができ、「地域市民事業基金」の創出に向けての出発点になったものと思われる。

豊島区で動き出す「地域市民事業基金」に注目していきたい。

■太陽とかぜの学校 グリーンエネルギーで地球を元気にしよう

主催 ふるさと環境市民の会（神奈川県：代表 安藤多恵子）

<http://www.furusato-kankyo.com/>

開催日 2004年3月30日（火）

ふるさと環境市民の会は、「考えは地球規模で、行動は足元から」をモットーに、神奈川県で活動している団体である。環境学習出前講座や親子環境塾、ごみマップ（不法投棄）づくりなどに取り組んでいる。

今回のイベントは、「太陽とかぜの学校」。親子を対象にし、参加者には持続可能な社会づくりのために、「自分たちができることは何か」を考える機会をつくり、将来的には市民共同発電所設立などにつなげていきたいという目的で企画したイベントである。

ふるさと環境市民の会が中心になって、環境関係の市民グループや学校の先生たちと一緒に、プログラムの検討を行った。国際竹とんぼ協会にも協力をお願いすることにした。

綾瀬市綾西小学校の校庭を借りてのたった1日の学校だが、内容は多彩である。「竹とんぼ飛ばし大会」や「かぜの風船で遊ぼう」、「太陽電池のソーラーキット工作」、「しぜんのエネルギーに



ついて」の紙芝居。当日は天気にも恵まれ、小中学生の親子60人が参加し、楽しい1日になった。

参加者からは、自分たちが日頃何気なく使っているエネルギーに対して興味、関心を持ったり、考えたりするきっかけになったと好評だった。また、親子で参加することで意味があったし楽しめたというお父さんもいた。温暖化防止の環境的意義と、親子間のふれあいの場の提供とが

同時に実現できたのである。イベントへの参加を契機に、環境問題について親子で話し合うようになれば、素晴らしい成果といえるだろう。

ふるさと環境市民の会にとっては、企業や他団体とのコラボレーションができたことが大きな成果だった。環境問題はすべての人につながっているテーマである。今回は行政を巻き込めなかったが、次回は行政も巻き込んで、さらに活動の輪を広げて行く予定である。

メッセージ

新たな支え合いの輪づくりに向けて コムケアの仲間になりませんか

日本は本当に豊かになったのでしょうか。
私たちは経済的な豊かさを追求するあまり
何か大切なものをおろそかにしてしまったのではないのでしょうか。

たとえば

お互いに気遣い合うところ。

人と人の気持ちのつながり。

物や自然と心との通わせあい。

そして

誰もが安心して気持ちよく生活できる社会。

コムケア活動は

そうしたつながりや社会をみんなで回復して行こうという活動です。

みなさんもぜひコムケアの仲間になってください。

資金助成プログラム以外にも次のようなプログラムがあります。

みなさんのご参加をお待ちしています。

コムケアメーリングリスト

コムケアサロン

テーマ研究会

コムケアフォーラム

コムケア活動や各地でのコムケア仲間の集まりの支援

コムケア活動を支援してくれるボランティア（コムケア応援団）も募集しています。

コムケア仲間やコムケア応援団への参加をご希望の方は

コムケアセンターまでご連絡下さい。

コムケア活動は住友生命社会福祉事業団の支援によって展開されています。

謝辞

この3年間の活動を支えてくださった、住友生命社会福祉事業団および住友生命保険相互会社に感謝いたします。

両者は、私たちの活動に全幅の信頼を与えてくださり、コムケアセンターの主体性や自律性を尊重してくださいました。しかも、資金的な支援だけでなく、活動面でも一緒に汗を流してくれました。コムケアセンターが、常に新しい活動に取り組めたのも、コムケア仲間の世界が広がり、コムケア活動の枠組みができたのも、住友生命社会福祉事業団および住友生命保険相互会社のおかげです。

そのことを、多くの人たちに知っていただきたいと思い、敢えて、追記させていただきました。



ケアップくん

ケアップくんは、おおざっぱで細かいことを気にしない、昼寝の大好きなカエルです。困った人をほっておけないタイプのお人好しなのですが、やりたいと思ったことには脇目もふらずに突き進んでしまう一本気なところもあります。

広い田圃のなかで、一人で悪戦苦闘しているようにも見えますが、ひとたび彼が歌い出すと、どこからともなく様々な声が呼応して、いつのまにやら大合唱になるのです。

<http://homepage2.nifty.com/comcare/>

2004年5月10日

コムケア応援団

安藤千賀、井上英之、小川清史、鎌田芳郎、亀ヶ谷一寿
菅野弘達、小山美代、佐藤隆、新谷大輔、瀬谷重信
田辺大、那須直樹、錦織一臣、西村佳子
早坂宏、宮川元則、宮田穰、渡邊早苗

資金助成プログラム選考委員

片岡勝、北矢行男、木原孝久、高橋流里子、町田洋次、松原優佳

コムケアセンタースタッフ

大川新人、佐藤修、佐藤泰弘、佐藤ユカ、橋本典之、宮部浩司、矢辺卓哉

デザイン

宮部浩司

企画・編集

佐藤修

発行（照会先）

コミュニティケア活動支援センター

東京都文京区本郷3-37-8本郷春木町ビル9階

〒113-0033

電話：03-5689-0957

Eメール：comcare@nifty.com

ホームページ：http://homepage2.nifty.com/comcare/